
五右八郎

85子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

五右八郎

【Nコード】

N2939K

【作者名】

85子

【あらすじ】

宇喜多秀家とゆかいな仲間たち。

負けちゃったからには仕方ない。おっさん従え、トンジキ片手、たまには女もひっかけて、ひたすら京まで走るのみ。今日もみんな元気です。

そんなお気楽冒険時代劇。フィクションレベルは、水戸黄門の300%増くらい。秀家ファンの人はずまんかった。

おっさんとわたし

五右衛門が、素槍を杖に粕川かすかわべりを歩いていると、横手から何か
が転げ落ちてきた。急勾配の山肌を転落してくる何かはすさまじい
勢いで、とても避けきれたものではない。いつしよくたになって、
河原へ叩きつけられた。こめかみをしたたかに打ち七転八倒する。
横で何かも悶えている。どうやら人であつたらしい。

こめかみをさすりつつ目をやると、うめいているのは泥団子のよ
うな汚い男であつた。

落武者だ。

懐へ飛び込んできた獲物を前にして、五右衛門はにわかに関力を
取り戻した。よく見れば、落人の装備はなかなかによい。バラして
売れば相当な値になるだろう。落人狩り冥利に尽きる。

舌なめずりし、五右衛門は男の横つ面を蹴飛ばした。ついでに、
槍の柄で小突き回してやる。

「や、やめい」

落武者は、まばらに毛の生えた月代さかやきを、弱弱しくかばつた。

相手が非力とみれば嵩にかかるのが五右衛門である。出しなに犬
の糞を踏んづけた草鞋で、男の鼻をぐりぐりやる。ざんばら髪を掴
んで引きずりまわし、顔面めがけて屁も垂れてやつた。

いざトドメを。

槍穂を繰り出しかけたそのとき、落人の転がってきた山肌から、
すさまじい塩辛声が駆け下りてきた。

「殿ーっ！」

すわ、仲間がいたか。

五右衛門は目を凝らす。援軍は一人であるが、いかにも強そうな
中年武者ときた。

のたうつ泥団子男にもう一蹴りくれて昏絶させ、五右衛門は逃げ

だした。強者に対しては逃げ一辺倒なのもまた五右衛門である。しかし、中年武者の足は恐ろしく速かった。追っついてきたかと思つと、あつという間に拳骨で殴り倒され、五右衛門は地へ伏した。完敗である。

うめく五右衛門の襟首を巨大な手で捕拿して連行しつつ、中年男は、泥団子の安否を確認しに向かった。

「殿、ご無事でありましょうや！」

泥団子は白目を剥いてぶっ倒れている。中年武者は、慌てて泥団子の首筋に指を当て、脈を確かめた。曇っていたゲジ眉がほつと緩んだ次の刹那、強盗殺人犯のような凶悪きわまりない形相で、五右衛門を大喝した。

「きさま！ どなたを足蹴にしたか分かっておるのか！」

五右衛門の顔面が地に叩きつけられる。

「ぐえっ」

おっさん武者は、鼻血の噴き出した五右衛門をひっくり返し、衣紋をひっ掴んだ。泥で汚れたいかつい顔が近づくと、その荒い鼻息に、五右衛門の口髭はそよそよした。

「よう聞けよ。きさまが蹴りをくれたこのお方は、備前岡山五十七万石・宇喜多中納言さまにあらせられるぞ」

宇喜多中納言秀家といえば、五大老として徳川家康や毛利輝元・上杉景勝・前田利長と肩を並べる大大名だ。先日、関ヶ原で起こった戦では、敗れた西軍方の主力であった。故・豊臣秀吉の猶子にして、同じく故人・前五大老前田利家の娘婿でもある。とんでもない大物だ。

五右衛門は乾いたヒキガエルみたになつた。

「……うそ」

「嘘などぬかすか」

おっさんの目がマジである。五右衛門は、首のもげる勢いで必死にかぶりを振った。

「なしなし！ さっき蹴つたのなし！」

「なしになどなるか、あほうが！」

おっさんは五右衛門をもういちど地面に叩きつけて、大刀を抜いた。腰の抜けた五右衛門の喉首に、切っ先が突きつけられる。

「下郎の分際で我が殿を害するとは、覚悟あつてのことであろうな」「ないない！ 覚悟なんてないつてば！」

「死ね」

「きやー！」

逃げようともがいたが、おっさんに蹴られどつかれ、地に伏せる他ない。

思えば、生まれたときから汚えない物作り。田を耕し泥をすすり、あげくあんな汚い泥団子やろくに構ったせいで、おれの人生は……などと、おもいでが走馬灯云云をやっていると、川下のほうから五右衛門を呼ばう声がした。

「旦那さまー」

聞きなれた声。下男の九蔵だ。五右衛門は咽喉も裂けよと叫ぶ。

「九蔵！ 助けて助けて！」

この際、現場に遅れてきたことも、普段めしを盗み食いしていることも、足がものすごく臭いことも問わない。まさに地獄で仏である。

「九蔵！ きゆうぞーう！」

「ええい、動くな！」

おっさんは、もがく五右衛門の顎を蹴りつけた。はずれた顎にあわわする五右衛門を尻目に、九蔵と相對する。

二人とも、六尺（約一八〇？）もあるうかという大男だ。地べたへ這いつくばった五右衛門から見ると、かの泰山もかくやという威容だった。

「え。なに？ おじさん誰なの？」

「きさま、このわっぱの一味であろう」

「旦那さまは、わっぱってゆーか、おっちゃんじゃない？ どっちかってゆーと」

道理。五右衛門は数え三十八である。

「どつちでもよいわ！」

「おじさんがどつちでもいいってゆーなら、それでいいけど」

九蔵のとんちきで場が緩んだ隙に逃げようと画策するが、おっさんはそう甘くなかった。ほふく前進する五右衛門の背を、巨大な武者草鞋が踏みつける。

「ぐえっ」

「とりあえず、このわっぱにもきさまにも、死んでもらう」

「えっなんで？」

九蔵が目をまん丸くした。おっさんは頬の肉を歪め、唾を吐き捨てた。

「地獄で、不届きな主に訊くがよい」

「ねー旦那さま。なんで？」

「地獄で訊けと言つておろうが！」

焦れたおっさん武者は、やにわに九蔵へ斬りつけた。頑健だけがとり得の九蔵である。ろくすつぽ飯も食っていない落人に遅れをとるはずがない。軽やかな足捌きで一撃目を避け、二太刀目を白刃取り。ひるんだおっさんから、みごと刀をもぎ取った。

「よっしや九蔵！」

相手が丸腰となれば、五右衛門の出番である。おっさんの後ろ頭に飛び蹴りをくらわせ、倒れたところで腕を後ろに擦りあげた。すかさず荒縄で捕縛する。

「あつ、いくらなんでも可哀相だよー」

「あほ！ おまえ、今こいつに殺されかけたんだぞ！」

「でも、この人ごはん食べてないみたいだし」

「そういうヤツから身ぐるみ剥ぐのが、落武者狩りつつうんだよ！ 喧しくやりあう五右衛門と九蔵の横で、後ろ手に縛られた中年武者は、さめざめと涙を流した。

「天下分け目の戦に破れたばかりか、我が殿すらお守りできず。拳の果ては百姓に打ち伏せられ……なにがもののふか」

拭えぬ涙が地を濡らす。もらい泣きした九蔵が、ばつち泣き面で五右衛門に訴えた。

「ね、旦那さま。この人たすけてあげようよ。ごはんくらい食べさせてあげてもいいでしょ」

「おまえがバカみたいに食うせいで、うちに余分な飯なんかないよ」
「おいら、今日一日たべるのガマンするから。ね、お願い」

五右衛門の脳内で、そろばんがけたたましく珠をはじき始めた。宇喜多秀家の首を差し出せば、徳川方から恩賞がたまり出るであろう。逆に、秀家を助ければこちらが罰を受けかねない。よしんばバレずに匿いとおしたとしても、敗軍の将である宇喜多に期待できるものは少ない。

「だめ。やっぱ殺すわ」

五右衛門が繰り出した槍の穂先は、甲高い音と共に逸れた。九蔵が、さつきおつさんから奪った打刀うちがたなで払いのけたのだ。

「あつ。おまえ何すんの」

「こんなかわいそうな人を殺すなんてだめだよ」

「おれに口答えすんの」

「この人を殺したら、おいら家出しちゃう」

「勝手にすればいいじゃん」

正直、口が減って大助かりである。

九蔵の瞳と刀が、ぶるぶると震える。

「旦那さまは、おいらがいなくなっても、いいの……?」

溢れる涙が剣呑に光る。情動に忠実な九蔵のことだ。癪癪を起したら、犬だろつが主だろつがバツサリ殺りかねない。

落武者ふぜいに絆されて主人を泣かせるとは、なんとという恩知らずのシャバ塞げであろうか。腸が煮えくり返ったが、腕つぶしで九蔵に勝つことは不可能であるし、話が通じるほど賢い相手でもない。五右衛門は、しぶしぶ槍を収めた。

「わかった、わかったよ。好きにしたらいいじゃん。そのかわり、おれが嫁に怒られたら、おまえが土下座してあやまってよ」

「うん。ありがとう旦那さま！」

無邪気に笑う九蔵の顔を諦観の境地で眺めながら、五右衛門は脳内そろばんを再びはじいた。居候が二人増えるくらいなら、家計への打撃も、それほど大げさなものにはならないだろう。金が足りなければ、宇喜多主従の身ぐるみを売っぱらえばいい。損だけはしないはずだ。

五右衛門は、おっさん武者に手を差し出した。

「おっさん歩ける？ お殿さまは九蔵が負ぶってくとして、おっさんには歩いてってもらわないと」

うすらでかいうえに臭いのを背負っていくのはゴメンである。

「わっぱが。馬鹿にするでないわ」

九蔵により縛を解かれた中年武者は、先ほどの飛び蹴りが効いたのかフラフラしながら立ち上がり、忌忌しげに毒づいた。嫌われたところで痛いことは何もないので、五右衛門はフーンとだけ返した。膝に手をつき息を整え、おっさんは悔しげに声を絞りだす。

「きさまの世話になるなど武士の恥であるが、我が殿の御為。世話になる」

「おじさん、よろしくね」

「よろしく頼む」

九蔵がほほえみかけると、おっさんは五右衛門への態度とは一変、深深と頭を下げた。寢床・飯・日用品などを提供するのには五右衛門であるし、匿っているのがバレた場合に罰を受けるのも五右衛門である。それであるにも関わらずこの態度というのは納得がいかないが、ゴネたところで体力の無駄でしかない。ちんこに竹箸刺して力マ掘ったるか、などとおっさん武者を呪いつつ、五右衛門は、九蔵が秀家を担ぎ上げるのを見守った。

「じゃ、ぼちぼち行こっか」

「待て」

いきなり腰を折ったおっさんを、五右衛門は睨んだ。

「おれの世話になんのが嫌になった？ それならそれで歓迎だけど」

「違つわ」

おっさんはギロリと五右衛門を睨み返してから、山の斜面を指した。

「じき仲間が追いついてくる。しばし待ってもらおう」

「仲間？」

「うむ。あと六人ほど世話になる」

悪びれずに言いやがったおっさんへ頭突きをくれてやりたいところだが、先ほどの飛び蹴りで相手は衰弱している。へたをうって失神させたら、担いで帰らなければならない。こんなむさ苦しいおっさんに密着するくらいなら、肥溜めで顔を洗ったほうがマシである。五右衛門は殺意をこらえた。

「嬉しいね、旦那さま。たくさんいたほうが賑やかだもん」

破顔した九蔵の脳天に、五右衛門は渾身の手刀を叩き込んだ。

お殿さまとわたし

泥団子宇喜多秀家の他は、例のおっさん武者が進藤三左衛門。以下、黒田勘十郎・森田小伝治・虫明九平次・蘆田作内・本郷義則・山田半助の総勢八名である。

彼らと出会った中山郷の粕川沿いから、一刻半（約三時間）ほどかかって、白檜村にある五右衛門宅へ辿り着いた。百姓渡世とはいえ、もともとは郷土で、そこそこ由緒のある家である。家屋敷は割合に広い。ただし、先祖から受け継いだのは土地と名だけであるので、勝手元は火の車。直裁に言えば素寒貧である。

ない米かき寄せ湯漬け振る舞い、タライ並べて行水させ。奥座敷に布団をのべ、居候どもを雑魚寝させた。

米びつは、あつという間に空である。宇喜多一行を世話していくには、いったいいくらあつたらいいのか。五右衛門の心は、早くも後悔の念で溢れんばかりである。唯一の救いは、女房のおカネが、秀家の高貴な血筋に感動し、喜んで一行を迎えたことだった。

「ふむ。で、ここはどこじゃ」

地炉の間で横座に陣取った秀家は、殿様らしく尊大に尋ねた。囲炉裏にくべた薪が気になるらしく、しきりに火箸で突つつきまわしている。

失神による強制入眠であつたとはいえ、道中ぐつすり眠りこけていたので、秀家の顔色はいい。顔を洗い、月代をきれいに剃った姿は、なかなかどうして素晴らしい男前である。間に合わせに貸した五右衛門の粗衣も、秀家が袖を通せば別物のように輝いて見える。

「は。白檜村にございます」

飯さえ食えば元氣横溢。おっさん武者の進藤三左衛門が威儀を正して答えた。

こっちは、肌を磨こうが鬚を結おうがむさいままだ。ただ、汗臭

さが消えたので比較的マシではあった。髭モジャのごつい顎を、五右衛門に向けてしゃくる。

「わっぱ、詳しくお聞かせせよ」

「助けてもらったくせに態度でかくない？」

「なんだと！」

掴みかかろうとした三左衛門を、秀家が火箸を振って制した。

「わしが問おう。そちは何という名じゃ」

「矢野五右衛門だけど」

「恐れ多いぞ！ 頭を下げぬか！」

「ちと黙れ、三左」

秀家は、再び三左衛門を止めた。

「こたびは、そちに面倒をかけるが、よろしゅう頼む」

頭を垂れてなお凜とした威厳が備わっている。さすがは殿様だ。

三左衛門が額に勘筋を浮かべ、唾を飛ばした。

「殿！ このような下郎に頭を下げてはなりません！」

「よいのじゃ。わしらがこうして生きておるのも、この者のおかげ」

蹴とばしたおかげで若干記憶が飛んだ模様である。三左衛門が真

相を暴露する前に、五右衛門は慌てて口を入れた。

「いいよいいよ。女房も娘も、お殿さまのこと気に入っちゃったみ

たいだし」

障子の陰から半身を覗かせこちらをうかがう娘を、五右衛門は引つ張り出した。娘のおふさは芳紀ほしきまさに十六歳。豊かな黒髪に縁取られた下膨れの顔と切れ長の目に、おちよぼ口が愛らしい。我が娘ということ差し引いても、すばらしい美女である。貧乏農家の娘とはいえ、秀家の手がうまくつけば、一家そろって大名の親戚になれるかもしれない。ここは、おふさの美貌を訴える好機だ。

五右衛門は、秀家の反応をうかがった。

鼻くそをほじっている。

まったく興味なげで拍子抜けだが、秀家は良家のお殿さま。美人など見慣れているだろうし、好みであったとしても下民のようにガ

ツガツはしないのである。これから始まる陰所生活の侘びしさと徒然のうちに、うつぶんあっはんする機会もめぐってくるはずだ。

がんばれよ、と五右衛門は、おふさのでかい尻を叩いて、勝手へ酒をとりやませた。

「しかし、困りましたな」

三左衛門がおふさのケツを目で追いながら溜息をついた。

お殿さまは外したが、おっさんは射止めたらしい。ここで主張しておくが、こんな中年男の嫁にやるくらいなら、馬グソについたフンコロガシにでも嫁がせたほうが数千倍マシである。

五右衛門の煩悶も露知らず、無邪気に炉を突っつきながら、秀家は首を傾げた。

「何が困ったのじゃ」

「ここ矢野家があるのは、幸いにして村のはずれ。しかしこう大人数で隠れていては、見つかるのも時間の問題でしょうぞ」

「……うむ」

秀家は腕を組んで唸った。滑らかな額と長い眉が、障子ごしの日

に照り映える。五右衛門ですら惚れ惚れする男っぷりだ。
「追い出すようで心苦しゅうはあるが、何人かは京へやらねばなるまい。母上とお豪（うご）に無事を伝えねばならぬし」

お豪というのは、故・前田利家の四女で、秀家の妻である。

「では、二、三日休ませたのち発たせましようぞ。ここに残るのは拙者と……そうですね、黒田勘十郎がよいでしょう」

「うむ」

話はまとまった。三左衛門のおっさんが残るのは非常に迷惑だが、三人くらいなら大して目立つこともない。何とか隠し通せるだろう。その上、さらなる案が五右衛門にはあった。

「あかさ」

「なんだ」

突き刺すようなおっさんのすがめは無視して、五右衛門は秀家に向き直った。

「うちの裏に岩穴があるんだけど。そこに隠れるのはどう？」

「きさま！ 我が殿へ泥の上で寝ると申すのか！」

「三左。待てというに」

秀家が鋭く咎めた。凜々しいまなじりをキツと決し、重重しく頷く。

「わしは、日が落ちたらそこへ移る。三左と黒田は、下僕の振りをすれば多少自由に出歩けるであろう。屋敷へおいてやってはくれぬか」

また声をあげかけた三左衛門へ、秀家はかぶりを振ってみせた。

「わしが決めたことじゃ。そちらは、ここで追っ手に備えよ。矢野家のたずきを助けることも忘れてはならぬ」

「……御意」

三左衛門は、鼻息を荒くして甚だ不満そうであるが、とりあえずは決着である。五右衛門は囲炉裏の五徳から鉄瓶をとって、みな茶碗へ湯を注いだ。

「ま、気楽にいつてよ。岩窟つつても、虫やお化けがでるわけじゃないし。窓はないけど、こんなボロ家の中よりずっと快適だからさ」

勝手から戻ったおふさが秀家に酌をする。一気に杯を干すと、秀家の頬はパツと薄紅を帯びた。秀家は、二十八の男盛り。若い肌が桜のごとく匂いたっている。それを見たおふさが、まつ毛を伏せて顔を赤らめた。

好機逸すべからず。今こそ二人きりにして、懇ろになつてもらわねばならない。五右衛門は腰を浮かせた。

「あ、おれ、ちょっと用事おもいだしちゃったから、出かけてくるね。んで、おっさんは今から外。九蔵が裏で薪割ってるから」

「なんだと？」

「下僕のふりするんでしょ。練習練習」

「ふざけるな！」

「三左」

秀家の毅然たる声に撃たれ、三左衛門は平伏した。

「はっ」

「手伝うてくるのじゃ。恩義は、できうる限り返さねばならぬ」

「……承知」

いまから殺人を決行するようなものすごい顔で五右衛門を睨みながら、おっさんは土間へ下り、屋敷裏へ向かった。

「んじゃ、おれも行ってくるね。おふさ、お殿さまにちゃんとお酌しなきゃだめだよ」

「はい、父さま」

消え入りそうな声で返事をしたおふさのケツをもうひと叩きして激励し、五右衛門も板間を後にした。ここは、おふさの手練手管と、秀家の生殖本能に期待するのみである。

お役人とわたし

宇喜多一行の衰弱は思ったより激しかった。全員がようよう歩けるようになったのは五日後である。森田・虫明・蘆田・本郷・山田の五人が、行商や修験者に化けて大坂へ発ったのは、それからさらに五日後であった。行商はともかく、修験者の装束を揃えるのに時間がかった。平凡な農家に、兜巾とぎんやら篠懸すずかけやらの修験道具のあるわけがない。

それらを仕入れた出費にガツクリきている五右衛門へさらなる追い討ちをかけたのは、屋敷裏の洞へ移った秀家であった。十日前のしおらしさはどこへやら。すっかり地顔をさらしてワガママお殿さまと化していた。

「黒田。わしは猿ひきが見たいのじゃ。捕まえてまいれ」

「ご、ご勘弁を……。そこいらの猿を捕まえてきたところで、猿回しはできませんぬ」

「ならば、そちが舞うてみせよ」

侍のくせ、えらく気の弱い黒田は、日に三度は秀家に泣かされて帰ってくる。一方の三左衛門は、矢野家の余業である山仕事に気に入らしく、裏の山へ入っては木を切り倒してばかりいる。九蔵は野良仕事。女房のおカネは、にわかには増えた洗濯と勝手仕事に大わらわだ。自然、この手の面倒ごとは五右衛門へ回ってくる。

「ほら、泣かないでよ黒田ちゃん。お殿さまが駄駄をこねるのは、いつものことですよ」

「も、もう私は嫌でございます！ 昨日はドジョウすくい、一昨日はひよつとこ踊り、今日にいたっては猿の真似まで……。私は、武士として情けのうごごいます」

百姓にとりすがって泣く時点で武士として如何なものかとおもわなくもないが、それにしても秀家のワガママは度を越している。

そういえば、いつぞや小耳に挟んだ巷談で、秀家が家臣を軒並み伴天連ばてれんに改宗させようとしてお家騒動になった、というのがあった。当時は、そんな天骨もない殿様があるかと話半分に聞いたものだが、今ならば分かる。あの秀家ならばやりかねない。それどころか、このままいけば、矢野家全員を庭へ並べて盛大な猿踊り大会を催しかねない節すらある。

胃の痛みを訴えだした黒田に肩を貸し、屋敷の西にある壺屋へ連れて行く。もともとは九蔵が寝起きに使っていた小屋であるが、いまは下男に化けさせた黒田と三左衛門もいっしょに住まわされている。むさい大男に挟まれた窮屈な暮らしも黒田を追い詰める要因になっているのかもしれないが、こればかりはどうしようもない。黄茶ばんだ藁布団へ瘦せた体を寝かしつけ、五右衛門は秀家のいる岩窟へと足を向けた。

中に入ると、秀家はおふさを横へ控えさせて耳くそをほじっていた。

「お殿さま。あんまり黒田ちゃんをいじめたら、かわいそうだよ」

「ここはつまらぬのじゃ。黒田の泣き顔でも拝んでおらねば、無聊ぶりようで死んでしまっわ」

「うちのおふさがついてるんだからさ。そっちに構ったらいいいじゃない」

気が利くうえに辛抱強いおふさならば、秀家の注文に承えられるであろう。そしてそんな健気なおふさに心を開く秀家……というのを五右衛門は期待している。しかし現実には、今日に至るまで秀家はおふさの手すら握っていない。

脇に控えたおふさをチラと見やってから、秀家は手近な岩肌へ耳くそをなすりつけた。

「わしは、年若いおなごを困らせるのは嫌いじゃ。こきつかうならば、もちっと年増で頑丈なのがよい」

秀家くらい育ちがよいと、こういう余裕が出てくるのかもしれない。女ならば嬰兒えいじから骨壺までどんと来いの五右衛門は、自らを省

みた。しかし、反省はしても改めないのが五右衛門である。

「おれとお殿さまの仲じゃない。気づかないでよ。何だったら、今からちよこつと外でてようか？」

おふさが真つ赤になって顔を伏せる。秀家は興味なげに手を振った。

「娘御は勝手へ戻してかまわぬ」

「それだと、お殿さまの世話をする人がいなくなっちゃうじゃない。秀家のことだ。一人にしておいたら隣村まで遊びに行きかねない。何といつても、つい今朝方、修験に化けた森田小伝治の負荷おいにへ潜り込み、京まで同行しようとした前科があるのだ。幸い、背負った森田があまりの重さに不審を抱いたところを、三左衛門が暴いて事なきをえた。とにかく何をするか分からない男なのである。

「じゃ、うちの女房にでも世話させようか？ いいかんじに年増だけど」

「そちの奥か。たしかに、気の置けぬ女であつたな」

「ガサツもガサツだから、お殿さまの注文どおりだと思うよ。とりあえず黒田ちゃんよりは打たれ強いし」

「うむ」

そんなわけで、五右衛門はおふさを連れて母屋へ戻った。女房のお力ネに用向きを伝える。単純なお力ネは、大名さまからのご指名に大興奮である。へちやけた鼻の穴を膨らませ、がに股をフガフガ言わせながら洞穴へ向かった。

おふさのような美女が追いやられ、あんな化け物まがいのオカチメンコが秀家に侍ることとなるとは、計算外であつた。人生とは不条理である。

忌忌しい気分でお力ネを見送つてから、五右衛門はおふさを伴い、再び壺屋へ向かった。手の空いたおふさには、寝込んだ黒田の世話をさせることにしたのだ。建て付けの悪い引き戸をガタガタやって足を踏み入れる。中は、山仕事から帰ってきた三左衛門が怒声を張り上げている最中であつた。

「黒田。きさま、武士として情けないとは思わぬのか！ 殿と同年のきさまならば、お側が務まると思うてわざわざここへ残したのだぞ！」

どっからどう見ても山男と化した三左衛門のおっさんは、ボロの作業着から突き出たド太腕で、黒田の首を絞め上げている。鬱屈が過ぎたのか、はたまた物理的に生命の危機に晒されているのか、黒田はうつろな目で宙空を凝視し、涎をデロデロと垂れ流している。「たんまたんま！ これ以上やったら、黒田ちゃん事切れちゃうよ」「わっぱが口を出すことではないわ」

フン、と三左衛門はそっぽを向いた。同時に、黒田の首もあらぬ方向へへし曲がる。慌てておふさが止めに入った。

「進藤さま、どうか黒田さまをお許しく下さいまし」

おふさが涙を浮かべると、とたんに三左衛門の顔面へ朱が注した。おふさは、よこれた土間へ両手をつき、上目遣いに三左衛門を見つめる。

「お願いでございます」

涙でたっぷりと潤んだおふさの目は、瑪瑙めのうのごとく斑に光っている。

「おふさ殿がそう言われるのであれば……致しかたあるまい」

あっさり折れた三左衛門の頬は、ほおずきをぶちまけたように赤い。おふさは可憐な笑顔を見せ、ひらりと頭を下げた。

「ありがとうございます」

「いや、なに……その。大したことで、は、ない」

絞めたままの黒田の首が、また少しゴキつとなった。あたふたと介抱するおふさの袖はまくれ、白い腕が露出する。慌てて三左衛門は目を逸らせた。いい年こいたおっさんの狼狽ぶりに、五右衛門はニヤニヤした。

「わっぱ。なにがおかしい」

べつに、と返そうとしたところで、九蔵がまるびつつ駆け込んできた。

「た、たいへん！ 旦那さま、たいへんだよー！」
「うっさいな」

三左衛門をからかってやろうとしたところを邪魔されて、五右衛門は九蔵を睨んだ。吹き出物の痕がのこる馬面は蒼白で、脂汗が一面に噴きだしている。

「なにおまえ。気持ち悪い顔して」

「落武者狩りだよー！ さっきお役人が来て、順番に家捜ししてるの！ お殿さまもおじさんも捕まっちゃうよ！」

五右衛門の顔面から、一気に血がひいた。

「ど、どうしょ！ 九蔵、おまえ、とりあえずおっさん連れて薪割でもしてて。ものすごく自然にね！」

「さ、さっき割ったばかりだぞ……」

うるたえる三左衛門の肩を押して、外へ追いやる。

「この際、三十年分くらい割つちやって！ おっさんは、九蔵の真似してれば大丈夫だから。お殿さまはおれに任せて！」

宇喜多一行が捕まるのは屁でもないが、そうなれば累るいは五右衛門にまで及ぶ。死守せねばなるまい。

「う……うむ」

「口調がかたいってば。そんなんじゃすぐにバレちゃうじゃん」

「う、む」

「おじさん、そーゆーときは、うん、って言えばいいんだよ」

九蔵がやってみせたように、おっさんは「うん」とこっくり頷いた。髭モジヤの熊男が幼児よろしく「うん」などとやるのはどう見ても尋常ではないが、いま現在そんなことにかまってはいられない。「いい？ 今までどおり、おっさんはうちの下僕ってことにしようよ。ボロが出ちゃまずいから、何か訊かれたら、来たばかりでわかんないって言えばいいから」

「うん」

ぎこちなく首を前後へ揺すりながら、三左衛門は九蔵とともに屋敷裏へ消えていった。黒田はおふさに任せれば大丈夫だろう。五右

衛門は台所へ走る。秀家に饗する酒肴を整えていたお力ネが、面倒げに振り返った。

「騒がしいね。いったい何なんだい」

ひからびた河童みたいな顔をしくさつて、おまけに亭主へこの態度。唾でもひっかけてやりたいところだが、あいにく今は余裕がない。

「落武者狩りが来ちゃった。とりあえず、酒と余分な食器かたして！」

農民ふぜいが昼間っから酒をかつくらっているのは反感を買うであろう。余計な食器も、不審を抱かれる恐れがある。隠してしまうにかぎる。

度胸の座ったお力ネだ。素早く状況を飲み込み、酒瓶と食器を勝手の端へ固めて、筵むしろで被った。

残るは秀家である。勝手口を出て、五右衛門は裏庭へ駆けた。

洞穴の正面には炭焼き小屋が建っている。そのうえ、小屋の横手と裏には薪や丸太がうず高く積んであるから、こんなところに岩窟があるなど、滅多なことでは気づかれはしないはずだ。割木の間をすり抜け、岩穴の入り口を覆う菰こもを押し分ける。

「なんじゃ、五右か。酒はまだかのう」

秀家は、寝そべって足を火鉢であぶっていた。

「落人狩りだよ！ 外でバタバタするけど、絶対に出ちゃだめだよ」

「よい座興ざこうじゃのう。ちようど退屈たいくつをしておったところじゃ」

「ぜつつたい出てこないでよ！」

しつこいくらいに念を押ししてから、五右衛門は納屋へ鍬くわを取りに走った。いかにも働き者のように鍬を担ぎ、母屋の上がりにはなへ腰を下ろす。一服する農民を演じるのだ。

役人がやってくるまでの時間が、ひどく長く感ぜられた。

「邪魔をする」

来た。

膝へ落としていた視線を、わざとゆっくり五右衛門は上げた。九

蔵がお役人と言ったから、どんな偉い人間が来るのかと思っただが、胸丸に股引・ボ口笠の、雑兵みたいなやつらだった。声をかけてきた男は、一人だけ薄汚れた胸服を纏っている。こいつが頭株であるらしい。

「このあたりに、石田方の落人が潜んでいるやもしれぬゆえ、屋敷を改める」

「どうぞー」

心臓バツクバク、全身が瘧のごとく震っていた五右衛門だったが、ここまで来たら尻腰しつこしあるのみ。農民の糞度胸を見せるときである。男たちを家へ上げ、地炉の間・勝手・居間・寝室と見せてまわる。最後に納戸を見せ、土間から外へ出た。

屋敷の西手へ回ると、黒田の伏せる壺屋だ。開きっぱなしの戸口をくぐる。

「これに寝込んでおるのは、だれだ」

黒田の脇へ控えたおふさが、うやうやしく指をついた。

「陸奥むつから療養にやってきた、遠縁のものにございます」

「ほう、陸奥から」

脂汗をかいてウンウン唸る黒田を、役人はうろん気に見た。

「はい。あちらは冷えますから、病人にはよくないのでございます」

「いつ来たのだ」

「三月ほど前でございましょうか」

受け答えに淀みはない。気が弱いと思っていたが、おふさもなかなかにやる。

「病人を、なぜこのような場所へ寝かせておる」

「それは……」

詰まったところで、井戸へ行っていたおカネが、タライを抱え入ってきた。

「やだね、お役人さま。こんな辛気臭いのを、うちの中に置いとくやしませんよ」

タライの水を黒田へぶっかける。びっくりして悲鳴をあげた黒田

の脇腹を、お力ネは蹴つ飛ばした。

「なんてことを！」

慌てておふさが介抱する。演技なのか本当に痛かったのか、黒田は息も絶え絶えである。

「こ、これ！ 乱暴はよくない」

役人が止めに入ったが、お力ネはそ知らぬ顔。空のタライで、黒田へさらなる打擲うちつけを加える。

「お役人さま。こいつを落人としてしよっぴいでくださいます。厄介払いができて清清するつてもんでしよう」

「馬鹿を言うでない！ 罪のない病人を召し捕ることなどできるか！」

おかねの非情さに恐れをなし、役人どもは逃げるように壺屋を出た。黒田には悪いが、ここはお力ネの手柄である。

一向は北へ回った。屋敷裏は開けており、九蔵と三左衛門が薪を割っている。山際に据えた炭焼き小屋が五右衛門の視界をかすめる。その奥には、秀家の籠もる穴蔵がある。なるべくそつちを見ないようにして、五右衛門は二人を役人たちへ紹介した。

「こいつら、九蔵と三左……三助、つていうんだけど」
「ほう」

頭分が目を細めた。

「きさまのうちには、随分と客がいるな」
百姓の三人暮らしに居候三人は、たしかに不審だ。

「おいら、お客じゃないよ。旦那さまの下僕だもん」
度胸があるのか馬鹿なのか、九蔵が無邪気に答えた。三左衛門のおっさんも、薪を割る手を休め、顔を上げる。さすがはもののふ大した胆玉……と言いたるところであるが、額が脂汗まみれだった。

「せ、拙者、いやワタクシ……ぼく、も」
引き攀った青い顔を、普段の九蔵よろしく少し傾げた。凄絶にぎこちない。不審者まるだしである。

「きさま、この土地の者か」

案の定つつこまれ、三左衛門はさらにシドロモドロになった。

「えーと……ぼくが来たのは、え、越前から。食べるものがなくなつて、ててさまとかかさまが、おまえはもう大きいんだから、出ていきなさいって」

「なぜここで世話になっている」

「おなかへつて倒れてたら、旦那さまが拾ってくれて。ごはん、食べさせてくれて、その、ぼく、だから、えと、かかさま……じゃなくって、き……来たばかりで、ぼく、よくわかんない」

五右衛門は笑いを堪えるのに必死だった。必死すぎて屁が漏れた。

「ね、分かったでしょ。こいつ、ちょっと頭が弱い」

五右衛門が三左衛門の背を叩くと、役人の大將は哀れむように目を細めた。

「三助といったな。おぬし、母が恋しいか」

「う、うん……」

脇でやり取りをじっと聞いていた雑兵役人が、目を潤ませて進み出る。懐から小銭を取り出し、三左衛門の巨大な手へ握らせた。

「辛いだろつが、がんばれ。いつかきつと、かかさまに会える」

「そうだ、がんばれ！」

「がんばれよ三助！」

他の役人どもも、何かしら取り出しては三左衛門へ押しつけた。

「おじさん、がんばってね」

九蔵も、懐から鼻紙を取り出して三左衛門へ渡した。すかさず五

右衛門は、九蔵の膝裏へ蹴りを入れる。

「おまえはいいんだってば」

「だって、おじさんかわいそう」

「ばか！」

もう一丁蹴っ飛ばしたところで、大盛況のお涙劇は終了。みんなで手を取り合い、お別れとなった。大ごとにもならず、その上おっさんを笑いものにすることができ、五右衛門は満悦至極である。

手を振って役人たちを送り出そうとしたところに、不吉な影がさした。悪寒を感じ、背後を振り返った五右衛門は、卒倒しそうになった。

酒瓶片手に、秀家がへろへろ笑っているのである。

「えらく楽しそうじゃのう」

「ブツ、ばつ、おうっ おおえはいくえあ」

目玉をひん剥いた五右衛門は、驚愕のあまりまともな文句が出ない。役人と手を握り合っていた三左衛門は、目をひん剥いて一瞬自失したのち、白目で不明瞭なことを吐き、発狂の様相とあいなつた。九蔵だけが、普段どおりの笑顔で秀家へシッシと手を振る。

「お殿さま。出てきちゃだめだよー」

「ばつ、お、おまえ！」

慌てて、鉢のひらいた九蔵のド頭を一撃したが、時すでに遅し。

三左衛門に小銭をやった侍が、秀家へ険しい目を向けた。秀家は、酔ってはいても貴種である。滑らかな白皙はくせきに涼やかな目元。唇は薄く華やかで、立ち居振る舞いは垢抜けている。ただの百姓でないことは一目瞭然だ。

「きさまは、誰だ」

頭株の男が、秀家をきつく尋問した。

「聞きたいのならば教えてやろうかの」

大きく胸を張り、秀家は尊大に腹を突き出した。

「わしこそは、備前岡山五十七万石・豊臣備前宰相よ」

「な……」

役人一同、声も出ない。

「関ヶ原にて惜しくも破れ、伊吹山をさすらうこと数日。ここなる矢野五右衛門に助けられ、本日まで世話になっておるのじゃ」

なにがおかしいのか、秀家はデカイ声で笑った。野山に反響して、五右衛門の耳をワンワンさせる。

その音声は、半狂乱だった三左衛門を完全なる狂気の世界へ叩き落したらしい。五右衛門がアツと思ったときには、三左衛門はまき

ざつぽを引つ掴み、秀家の脳天へ叩き込んでいた。

「ごめらつしよい。などという悲鳴を発して、秀家は地面へぶつ倒れた。そこへ三左衛門は馬乗りになって、胸倉を掴んでは放し、掴んでは放し。秀家の後頭部を地へ打ちつける。声を失っていた役人が我に返り、慌てて止めに入った。

「おい三助、殺してしまうぞ！」

「天誅冥罰仏罰豪苦天譴南無阿弥陀仏……」

「いかん！ 皆でとめよ！」

大将が号令すると、呪縛がとけたように役人たちが一齐に三左衛門へ組みついた。秀家から引き離し、揉み伏せる。眼球を上転させ白目玉を剥いた三左衛門は、呪詛の言葉を吐き続けつつ、なおも抵抗した。五右衛門は、さつき秀家を直撃した割木を拾って、三左衛門の脳頂へ打ち下ろした。

南京虫が潰れたような音がして、おっさんは動かなくなった。

「三助、三助！」

小銭侍が三左衛門の肩を揺する。うん、と唸った。生きてはいる。同じく秀家も、伸びてはいるが無事なようだ。

誰ひとり口をきかない。九蔵が居心地わるそうに身を振り、大きな音で屁を垂れた。救われたように、役人大将が口を開く。

「矢野の主人よ。こやつは……」

秀家が名乗ってしまった以上、言い逃れはできない。一度ギョッと目を瞑ってから、五右衛門は顔を上げた。

「隠してたわけじゃないんだけどさ。ほら、あれ」

覚悟を決めても、言い訳せずにはいられない性分の五右衛門であった。

「あのお殿さま、あんな性格でしょ？ 隔離しとかなないと危ないんだよね。近所の目もあるし。だから、ちよつと離れに置いといただけ。べつに隠してたわけじゃないって。ほんと」

「うむ……」

役人が厳しい顔をしたので、五右衛門は焦った。

「きつかけも、偶然ってやつ？ ほら三左衛……三助を拾ったときに、いっしょについてきたっていうか。そんなつもりはなかったんだけど、おっさんに泣いて頼まれて、それで。ほらおれだって人間だし」

「わかつておる」

大將は頷いた。役人たちが哀れみの目を五右衛門へ向ける。倒れた秀家にいちど視線を落とし、大將は五右衛門をまつすぐに見た。

もう駄目だ。覚悟のうえに諦めもつけた五右衛門は、大人しくうな垂れる。縄がかかるのを待った。あたりはひどく静かで、物音ひとつとてしない。風が一陣。

「まことにもつてあつぱれ」

「……は？」

予想外のことばに、五右衛門は目をパチクリさせた。役人大將は、五右衛門へ大きく頷きかける。

「わしの故郷にも奇人がおった。自分を大南公の再来だと言うてな。暴れおったんで、村の者で討ち取ってしまった」

刀の柄頭を寂しげに撫で、大將は目を伏せた。

「致し方のないことであつたとおもう。だが、きさまは違う。三助のみならず、妄想男までも生かしてやろうと苦心しておる。わたしは、自分が恥ずかしくなつた」

大將は、前草摺まえくすねずりの裏をまさぐつて巾着を取り出し、五右衛門へ手渡した。ずしりと重い。開けてみると、銭がいっぱい詰まっていた。びつくりして役人大將を見ると、弥勒菩薩みたいに微笑んでいる。後ろの下っ端どもも同じ顔をしていた。

銭をもらつておいて何だが、気持ちが悪い。

「これからも苦勞は絶えぬと思うが、これを足しに、三助と妄想男を養つてやるがよい」

言つて、役人どもは満足そうに去つていった。

「ねえ旦那さま。何をもらったの？」

にこにここと手元を覗き込んでくる九蔵をぶん殴る気力もない。へ

たりこみ、気絶した秀家と三左衛門を見た。ふたりとも、あほみ
いな顔をしている。五右衛門の指は、今なお細かく震っていた。ど
うも、助かったという実感がわかない。

さよならとわたし

「拙者、徳川へ自首をいたしまする」

とつぜん三左衛門が言ったので、五右衛門も秀家もポカンとなった。火鉢で炙っていた銀杏がジリジリと焦げ臭くなってきたところで、ようやく秀家が我に返った。

「いきなりなんじゃ、三左。つまらぬ冗談はよせい」

「そつだよ。おっさん、なに言つてんの」

五右衛門は、竹串から抜いた銀杏を皿に盛った。人糞に似た銀杏独特の臭気が、岩窟に充満する。

「転合ではございませぬ。自らの主へ刃を向けるなど、不届き千万の所業。拙者など、本来は誅されて当然の身でござる」

半月前に徳川の役人が襲来した際、三左衛門は発狂した。ややこしい事情があつたわけであるが、結果としては、念仏を唱え、秀家を滅多打ちにし、役人に遏止され、あげく五右衛門にのされて地に伏した。

悪いことに、三左衛門は狂気の域にありながらも、記憶がぶつとぶほど正体を失つてはいなかった。出来したすべての事象を克明に記憶しており、昏睡から覚め自らの所業を省みたとたん、また発狂した。正気に戻れば、再反の発狂を恥じ更に狂癪。三日ほどの間は、ほとんど乱人のような有様だった。

「そのことなら、気にするでない。わしはこうして生きておるのじや」

一方の秀家は、あけらかんとしたものだ。自らを殴打した三左衛門のことをサククリ許し、それどころか危機を脱することができたのは三左衛門の手柄だとして、厚く賞賛した。

第一にワガママ、第二に尊大、第三に思慮知能が欠乏しているなど問題は多すぎるほどに多いが、そもそもの秀家はあっさりしたよ

い男なのである。

五右衛門は、おっさんの皿に取り分けた銀杏へ塩を振ってやる。

「お殿さまもこう言ってることだし、気にしなくてもいいんじゃない。だいたい、徳川へ自首なんかしたら、おっさん殺されちゃうじやん」

「覚悟の上だ」

飛び出んばかりに見開かれた三左衛門のまなこが、揺らぐ灯火を映して白く光る。強い髭に覆われた口元は、くろがねのごとく融通なく結ばれている。厚いくちびるが鈍鈍しく開かれ、決意を湛えた声が、座をとりかこんだ岩肌へ低く反響した。

「いずれは、殿もここをお出にならねばなりません。しかし詮議は未だ厳しく、あとふた月は動けますまい」

「それだったら、おっさんももうちょっとここで待ったらいいじゃない」

「わっぴは黙っておれ」

有無を言わせぬ三左衛門の口調に、五右衛門は口をつぐんだ。

秀家の目をまっすぐにとらえたまま、三左衛門は続ける。

「ふた月もの長きあいだ、ここが発見されぬという保証はありません。ならばいつそ、拙者が徳川方に名乗りいで、殿は自害なされたと報告いたします。さすれば、詮議の手も緩むことでありましょう」

「ならぬ」

秀家はきつぱりと釘をさした。

「関ヶ原で破れたとき、わしの身命は果てるはずであったのじゃ。それをいまこうして全うしておるのは、そちが身を碎いてまで、苛酷な天命に逆ろうてくれたからこそじゃ。そのそちを死へ追いやり、どうしてわしだけが生きながらえよう。ここへ残れ」

「できませぬ」

微動だにせぬ三左衛門の鬢が、岩窟を吹き卷いた寒風にほつれる。毛束が一筋、頬へかかった。

「拙者は、殿をお守りするためにここへ残ったのです。それを、安穩としておつたばかりか、殿へ無礼の限りを尽くした不肖者でござる。死してなお償いきれませぬ」

「許すと言つたわしの言葉に従えぬのか。だいいち、ここに徳川の手が伸びるとは限らぬ」

「矢野家の銭もそろそろ底をつくころ。工面しようと駆け回れば、必ずどこかで足がつかまする」

「金ならば、先日、届いたではないか」

先発の五人は、ぶじ京へ辿り着き、円融寺えんゆうじに秀家の母・お福をおとなつた。喜んだお福からの書状を携えた虫明むしあけ九平次と森田小伝治が戻つてきたのが、五日前である。

「大坂屋敷のお豪へも、必ず秀家の無事を知らせる。なお、蘆田・本郷・山田の三人は、寺男に化けさせ寺内にて匿っているので、安心してほしい」

という文面に、金子が添えられていた。その翌日、虫明・森田に返書を託して発させたから、そろそろあちらへ着いているころだ。

「殿。無礼を承知で申します。あれしきの銭は、すでに使い切つて一分も残つてはおりませぬ」

三左衛門の言つとおりだった。先発隊の旅費をまかなうために借りた金をお力ネの実家へ返し、糧食を仕入れたら、余るところか足が出た。ちよろまかそうと思つていた五右衛門は、がっかりしたものである。

しかしながら、このあたりの事情を三左衛門が知つていゝとは、五右衛門はおもいもしなかつた。また瘋癲を起こされてはかなわぬと、この半月のあいだ、雑件はすべて伏せていたのだ。

おそらく三左衛門は、正気に返つた直後に出頭の決意を固め、矢野家の内情を見定めつつ、時機をはかつていたのだらう。秀家が矢野家に馴染み、先発隊からの知らせも届いた今は、たしかに時宜ときじである。

ささくれた筵へ手のひらをつき、三左衛門は平伏した。濃い影に

呑まれて、その表情は読めない。ただ懇願の声だけが、低く、**重重**しく、寒気の中へ満ちる。

「どうか」

「わしは、そちをなくしとうはないのじゃ」

そう言ったきり、二人とも黙った。

暗い。

火桶だけが、ことさらに赤赤と燃えていた。

出立とわたし

風が冷たい。山の端に昇ったであろう日は、低く垂れた雲に吞まれて、朝の世へ何の変化も与えてはいなかった。空は雪もよい。灰をぶちまけたように鈍く煙って、冷酷に地を圧している。今日は、厳しく凍てる一日となるだろう。

結局は、秀家が折れた。三左衛門の決意は、あまりにも固かったのだ。

せめてもの助けにと、秀家は愛用の脇差しを三左衛門へ託した。鳥飼国次。稀代の名刀である。徳川へ出頭するさいに提出すれば、秀家自害の証となるに違いない。あるじ気に入りの品を徳川へ差し出すことを三左衛門は渋ったが、「そちの身命に比すれば塵芥も同然よ」との秀家のことばに、涙ながらに受けた。

その脇差はいま、ふくさに包まれて、三左衛門の背にある。背負った笈おひをいちど揺すりあげてから、三左衛門は振り返った。修験者に扮したごつい横顔は強ばって、しかしどこか清清しくも見える。居並ぶ面面の顔を順にながめた。

五右衛門は気の遠くなるおもいがした。邪険に扱っていたとはいえ、ひと月もいっしょに暮らせば情が湧く。ましてや、共に危機を乗り越えた仲だ。死に行くのと分かっていて、胸が痛まぬはずはない。武士の決意に首をつつ込むわけにはいかぬと、先日以来、主従のやりとりに口を出しはしなかったが、本当は「行くな」と五右衛門は叫びたかった。

「わっば。世話になったな」

磊落に笑う顔を見ると、どうやっても素直になれそうになかった。「なに、しおらしくしちゃってさ。おれ、おっさんがいなくなってくれから清清してんだけど」

「フン」

そつぽを向いた三左衛門が小さく漏らした礼のことばを、五右衛門の耳はしつかり捉えていた。聞こえない振りをして、五右衛門も明後日のほうを向く。

「おじさん、本当にいつちやうの？」

「気をつけて行つとくれよ」

九蔵が、目に涙をいつぱいたためて、鼻をグスンとすすつた。お力ネは、笹の葉にぐるんだ手製の特大握り飯を、饞別に手渡している。この二人をはじめ、おふさや黒田にも、自首のことは伏せてある。大坂の宇喜多屋敷にいるお豪夫人のもとへ行く、と三左衛門が自ら伝えただけだ。本人も、そして五右衛門と秀家も、それが一番いいと思つた。引き止められれば辛くなる。

「進藤さま。どうか道中ご無事で」

おふさの白い頬に、なみだが滂沱ほうたと伝っている。拭つてやろうと袖を差しあげた三左衛門だったが、須臾しゆじゆんの逡巡しゆんののち、くちびるを噛みしめ目を逸らせた。代わりに黒田へ向き直り、ことさらに胸間声を張りあげる。

「殿のお命はきさまにかかつておる。後は任せたぞ」

「お任せください。殿は、私がお守り……あいたたた」

「無理をなすつてはいけません、黒田さま」

「いたた……すみませぬ、胃袋がチヨットねじれ……いつつつ、お任せくだ、くだ、くだ」

おふさに脇を支えられ、黒田は、食あたりしたぬらりひよんみたいな顔で胃を押さえた。

一瞬「拙者ほんとうに出てつてもいいのかな」という顔をした三左衛門であったが、すっかり痩せた黒田の肩へ分厚い手のひらを置き、熱いことばで激励する。

「黒田。きさまならば必ずや殿を守りとおせられるであらう。とおせられるに違いない。大丈夫だ。できるできる。うん」

半ば己に言いきかせる調子で強引に頷いておいて、三左衛門は九蔵へ向き直つた。

「九蔵どの。我が殿を、よろしくお頼み申す」

「おじさんも元気でね。おいら、絶対に大阪へあそびに行くからね」
「……かたじけない」

空を仰いだ三左衛門の目に、涙が光っていた。その目線を追って、五右衛門も顔を上げる。山の端を離れた日は輝きを増して、雲を隔てなお、目映い姿をはつきりと認めることができた。晴れてくれればいいと、五右衛門はおもった。

最後に、三左衛門は屋敷の北、秀家の籠もる岩窟に向かって一礼し、発った。

苛酷を極めるであろう三左衛門の行く末と、忠臣の決意を見送ることすらできない秀家の心中を思うと、五右衛門はただくちびるを噛むしかなかった。

手踊りとわたし

鬱鬱としていた。黒田は相変わらず寝込んでいるし、秀家の一人天下も鳴りをひそめた。あれほど手を焼いていたというのに、秀家がいざ大人しくなってみれば物足りなくすらかんずる。

そんな晴れない日日が半月ほど続いた霜月朔日。知らせが届いた。「なんて書いてあるの？」

書面を広げ眉を寄せる秀家の手元を、五右衛門は覗き込んだ。可憐な女文字が、折り詰めのごとき端正さで並んでいる。

大坂屋敷のお豪夫人からであった。

五右衛門が文面を読み取るよりも先に、秀家は勢いよく立ち上がった。その後頭部に鼻っ柱をおもいっくそ打たれ、五右衛門の眼前に銀漢がきらめく。

「いたたたた……。もう、いきなり立たないでよ」

「三左が、三左が！」

秀家は書状を投げ出し、よいこせよいこせと手踊りを始めた。

三左衛門の訃報に触れヤケツパチになったか。痛む鼻を押さえ、五右衛門は放り出された手紙を拾い上げた。

次の瞬間、五右衛門も盆踊りに加わり、派手な乱舞を繰り広げた。

三左衛門は、無事だったのである。

お豪の筆によれば、こうだ。

自首をした三左衛門は、徳川の家臣・本多正信のもとへ数日とめ置かれた。その後、三日に及ぶ厳しい詮議を受けたが「秀家は自害し、遺骸は茶毘にふした」と頑なに言い張ったそうだ。証拠の脇差もあることであるし、何より三左衛門の堂堂とした態度に感心した徳川方は、その言を信ずることとした。さらに、三左衛門の罪を許し、五百石で召し抱えたというのだ。

「あっぱれじゃ三左！ あっぱれ！」

「やったじゃん！ よかったよかった！」

ひとしきり踊り狂ったあと、五右衛門は母屋へ帰り、事の次第をお力ネ・おふさ・九蔵へ報告した。そもそも、三左衛門が自首のために矢野家を離れたことを知らなかった三人は驚き仰天、目を丸くした。お力ネは五右衛門を詰問してドつきまわし、おふさは感極まって涙を流し、九蔵は相かわらず鼻をほじったりなどしていたが、おのおのが落ち着いてみれば、これほど目出度いことはない。おつかい組の虫明^{むしあけ}と森田も加え、飲めや歌えや側転倒立、乱痴気騒ぎとあいなつた。

虫明・森田の二人は、京にいたにも関わらず、秀家の母・お福のいる円融寺^{えんゆうじ}に籠もりっぱなしで、世間の状況をほとんど把握してはいなかったらしい。

そんな穴熊状態に甘んじつつ境内の掃き掃除をしていると、参拝者の浮世語りに三左衛門自首の噂を耳にした。仰天したところへ、大坂屋敷のお豪から、秀家へ使わすようにと書状が届けられる。これは凶報に違いないと、韋駄天のごとく美濃まですつとんできたという次第だ。

「お方さまも人が悪い。無事と一言ことづけてくだされば、我らも気を揉まずに済んだであろうに」

虫明九平次が、薄い唇で苦笑しつつ杯を干した。年のころは四十二、三。トウが立ってはいるが、見事な美形である。

「よほどお急ぎだったのでしょう。それに、我らは事情を知らぬことになっていたので、わざわざ驚かせることもないというお心遣だったのだとおもいます」

森田小伝治は、闊達とした好青年だ。日焼けした肌に白い歯が眩しい。まだあどけない顔をしているが、体格は立派である。

この二人の側に並べられていつそう貧弱に見える黒田は、ちびちびと杯を舐めつつ咳き込んで、おふさに背をさすってもらった。

黒田の隣に座した虫明が、好き者めいた口調でひやかした。

「おふさどのは物言う花であるな。世話になれるのなら、拙者も寝つきたいもの。いや、いま寝込んだならば、御内儀が手をかけてくださるのかな。こちらもお美しい。まさに花妻だ」

珍獣の末裔みたいなおカネにまで世辞を垂れるとは、美男の割に虫明はゲテモノ喰いらしい。それとも、二月ちかくも寺と鄙の往復ばかりだったから欲求不満なのだろうか。

一方の森田は、おふさをちらちら盗み見ては、顔を赤くしている。若い森田にとつて、おふさのような美女は目に毒なのであろう。そんな森田を、虫明はかつこうの肴とみてからかいたおしている。黒田やおふさ、おカネにも微笑みが宿つて、矢野家は久かたぶりで明るい空気に包まれた。

とつくり片手に、五右衛門はそつと宴の間をあとにした。

今いちばん喜んでるのは、秀家なのだ。彼を岩窟から出すわけにはいかないが、せめて酒ぐらいはいっしょに飲んでやりたい。

母屋の脇を抜けて裏庭へ出ると、昼間であるというのにあたりは寒寒としている。葉の散り去った木木と、霜に湿気た土とがいやに黒く見える。五右衛門は周囲を注意深く見回した。

秀家の穴蔵があるのは炭焼き小屋の裏で、発見される恐れはまずない。しかし、こんな所帯じみたところを客人がウロついているのは不自然であるから、白昼に立ち入ることができる者は、五右衛門たち夫妻だけに限つてあつた。

そのため、きょう到着したばかりの虫明・森田は、まだ目通りすらしていなかった。お豪からの書状は、五右衛門が母屋で預かつて、岩室の秀家へ届けたのだ。

「夜中になったら、虫明さんと森田くんもこつちに来れるからさ。もうちよつと我慢してね」

「虫明も森田も、よう働いてくれる」

秀家は、桜色のくちびるを酒で湿らせた。入り口に垂らした筵の編目に渡された陽が、だんだらになって射しこんでいる。その光でムラ染めのようになった腕で、五右衛門は酒を注ぐ。火鉢の熾火に

下から照らされた秀家は、先ほど万歳までしたのに、いまはあまり嬉しそうではなかった。

「なんか不安でもある？ お金なら、お殿さまの奥さんから貰ったから大丈夫だよ」

「いや。そうではなくてのう」

いつもは不遜なぐらい直截なのに、秀家は珍しく言い淀む。五右衛門は待った。長いまつ毛をゾロリとしばたたいたあと、独白のように秀家はごちた。

「もう、三左とまみえることはないんじゃないのう」

「……うん」

そのとおりだった。

いずれ秀家は、頼れる大名のもとへ身を寄せ、そこを通じて徳川へ助命嘆願する。自害したはずの秀家が生きていくなれば、三左衛門がどうなるかは、火を見るより明らかである。

亡骸のような顔をして、秀家はうつむいた。

「わしは、三左にはばかり苛酷を強いておる。今すぐにも、逃げよと言つてやりたい。じゃが、それでは三左の覚悟に水を差すことになるう。結局は、なにもしてやれぬのじゃ」

膝の上に握った拳は、荒れて、骨が浮き出していた。黒田の衰弱に気をとられて今まで気づかなかつたが、秀家もずいぶん痩せた。

酒をあおつて勢いをつけ、五右衛門は、細った秀家の背を叩いた。「大丈夫。今は生きてるんだからさ。これからもおっさんが生きられるように考えようよ。皆で工夫すればなんとかなるって。ね」

「うむ」

小さな声で「すまぬ」と秀家は言った。あやまられるのは、初めてだった。

芸子さんとわたし

「ほら、黒田ちゃん、がんばって」

五右衛門は息を切らしながら、背に負んだ黒田を揺すりあげる。藁ぐつが雪にとられるうえ、足ゆびがかじかんで、おもうように前へ進めない。

「申し、わけ……ありません。このように、情けないことになるとは……」

やせ細った指で黒田は目尻を拭った。晴天に涙が光る。

「いいのいいの。でも、明日は元気になってよね」

ふらつく足を雪の山道に踏んばって、五右衛門はやつれてしぼんだ黒田の尻をポンポンと叩いた。

三左衛門無事の報から一月半。師走も下旬にかかった。

あれから秀家は、虫明^{むしあけ}と森田を使い、母のお福や妻のお豪と、幾度か消息のやりとりをした。彼女たちの筆によると、先発組の面は寺男として無難に身を隠しているし、三左衛門は徳川でうまくやっているらしい。落人狩りもやや下火になったとのことだ。とりあえずは小康である。

秀家は、矢野家を去る決心をした。

彼が矢野家に滞在して三月になる。一ところに潜伏するには長くなりすぎたのだ。目指すは京。秀家の母・お福のいる円融寺である。行程を順調にこなせば、年内には到着できるはずだ。

同道するのは、おつかい組の虫明・森田と、秀家とともに矢野家へ滞在している黒田である。そこへ、秀家の供を名目に京見物を計る五右衛門を加え、いざ出発。

となつたはいいのだが、案の定というか予想通りというか、胃炎もちの黒田は、一里（約四？）もいかないうちに見事にへばった。

そこで、しようがなく五右衛門が背負っていくことになった、という次第である。

「きさまは、百姓のくせに満足に歩けもせんのか」

虫明が、黒田を背に棒切れを杖に足を引きずる五右衛門へ、冷たい目を向けた。

「むちゃ言わないでよ。おれ、畑仕事なんてぜんぜんやったことないんだからさ」

野良仕事山仕事の類は、下男の九蔵へすべて押しつけている。平生の活動といえば、縁側に寝転んで屁をこくこと。最近で言えば、秀家の酒に付き合うことくらいなものだった。こんなかんじで、いてもいなくても問題ないむしろいないほうがいいくらいの身なので、少少家を空けようが家族から文句のすることはない。反面、怠け放題ゆえに、体力は子供以下だ。雪の山道で黒田が負ぶされれば、とうぜん死に体となる。背中ですしとと頬を濡らす黒田が重くて、五右衛門も泣きたくなってきた。

五右衛門・黒田からなる非力組を尻目に、おつかいで足を鍛えた虫明・森田は、駕籠を軽快に担ぐ。秀家が筵をまくって、駕籠の中から顔を出した。

「風流風流。まるで二人羽織のようじゃ」

裕福なお殿さまには、菅笠・合羽に股引という旅装束が珍しいらしい。さらに、そのうえへ寒さよけの蓑をモコモコにまとっているものだから、秀家が興味を持つこと一通りではない。

「のう、五右。ちとおどけてみせよ」

「むちゃ言わないの!」

「つまらぬのう」

五右衛門が一喝すると、秀家はプイとむくれて駕籠の中へ引っ込んだ。よれた筵を、ながえの後ろを担った森田が掛けなおす。

お殿さまの乗る駕籠とはいえ、馬鹿正直にチャラチャラ豪華なつくりにするわけにはいかない。身をやつすには病人がいちばんとい

うことで、秀家が乗るのは、九蔵に突貫でつくらせた病人駕籠だ。突貫ゆえ、つくりはいたって簡単かつ雑。皮を剥いだ丸太へ竹カゴをぶら下げ、そこへ布団を敷き秀家を乗せただけである。丸太のながえへ筵をかけたから、とりあえず秀家の姿を見られることはないが、いかんせん貧弱なつくりなので、風が吹けばとたんにめくれてしまう。

お粗末ではあるが、余分な装飾がないので目立たない。軽くて、担ぐのも楽だ。虫明・森田が苦もなく歩を進めるさまが、五右衛門には恨めしい。

「ねえ、森田くん。黒田ちゃん係と交代してくんない？」

「仰せつかったお役目を、途中で放棄するわけにはいきません」

「虫明さんは？」

「面倒は御免だ」

「同僚なんだからさ。もうちょっと優しくしてあげてもいいじゃない」

白檉村から粕川かすかわを越え、池田山の裾づたいに東南へ二里（約八？）ほど行くと、池田宿へ出る。そこから進路を南へとり、さらに二里半（一〇？）すすむと赤坂宿だ。京へ行くには、そこから東山道へ入ればいい。

初日の予定では、赤坂宿で一泊するはずであった。しかし、ヨレヨレの五右衛門・黒田のせいで行程が進まず、半分ほど行った池田宿で日が暮れてしまった。今夜はここで休むしかない。ごく普通の平旅籠に宿を定めた。

「五右、五右」

ぐったりうつ伏せになった五右衛門の袖を、秀家が引っ張る。若い秀家は元気いっぱいだ。部屋をとった二階の窓から身を乗り出し、道行く人の状況を、ちくいち五右衛門へ報告してくる。

「はいはい。今度はなに？ またとんでもないブスでも通った？」

「すごい大物じゃ。見てみい」

大物、の言葉につられて、五右衛門は畳から体を起こした。窓の外は暮色蒼然。花街のあちこちで点りはじめた行灯がやけに黄色っぽく光る。その中を、これから夜つびて楽しもうという人人が忙しく行き交っていた。

秀家の指差す女は、その中でも抜群に目立っていた。

まず第一に、でかい。頭は軒に届きそうであるし、戸口を潜ろうものなら巨大な尻が確実にひっかかるだろう。第二に、髪型が凄まじく奇天烈である。でかい頭を縮れ毛が綿帽子のごとく取り巻くさまは、一昔前に巷を騒がせた大泥棒・石川五右衛門を思わせた。

「なにあれ。ほんとに人間？」

「すごいのう。世の中は広い」

見世物小屋から脱走でもしてきたのかしらん？ と二人して首を捻っていると、女は、五右衛門たちの宿の斜向かい？ いまり屋？ という札のかかった料理屋へ入っていく。もちやもちやとした垢抜けない詰め袖を着ているが、もしかしたら芸妓なのかもしれない。

五右衛門と秀家が目を皿のようにしていると、女はいまり屋のれんをくぐる寸前、妙にあどけない仕種で通りを振り返った。軒明かりに照らされたのは、期待を裏切らず、晒し首にされた強盗のように凶悪な顔であった。ただ、前歯が一本欠けて黒い空洞になっているところにふしぎな愛嬌がある。

「おお！ いい女だ！」

後ろで様子を窺っていた虫明が、窓から身を乗り出した。森田が羽交い絞めにして必死に止めるが、お構いなし。石川五右子へ、通常ではとても聞いていられない卑猥な歓声を送りはじめた。

修羅場の森田と虫明をよそに、五右衛門の目は通りへ釘付けになっていた。激烈とも言うべき五右子の風体に気をとられて今まで気づかなかつたが、五右子に同道する女が数人あったのだ。その中の一人、のっぺりした瓜実に分厚く巨大な唇がのっかつた女が、五右衛門の好みド真ん中だった。虫明といっしょになって声を張りあげる。

虫明を羽交い絞めにした森田が、情けない悲鳴をあげた。

「や、矢野どの！ 我らは世を忍ぶ身です、お控えください！ あつ、殿まで！」

秀家は、どす黒い猩猩みたいな女へ手を振っている。

「ほれ森田。そちも早よう選ばぬか」

「森田くん、ああいう子がいいんじゃない？」

先日、森田がおふさに見とれていたのを思い出し、一番それっぽい女を五右衛門は指してみた。大当たり。森田は真っ赤になってあわわしだした。

「あ。黒田ちゃんにも宛がってあげないとマズくない？」

「どれがいいかのう」

秀家が値踏みする。五右衛門は、いちばん端にいる女を指差した。

「あれなんてどう？」

面倒見のよさそうな、母ちゃんみたいなオバハンである。

「ま、あれでいいじゃろ」

「うんうん」

自分のことではないので適当である。

そうこうしているうちに、女たちは料理屋の中へ姿を消していった。

さすがは手練れの虫明。短い時間の中で、彼女たちの所属する置屋みやはもちろん、個個の名前までも訊きだしていた。その抜け目のなさに、五右衛門と秀家は拍手喝采する。

さっそく宿の者へ申し付け、置屋へ使いをやらせた。結果は、明晩ならば都合をつけられるとのことだった。

「じゃ、ここで二泊しちゃおっか」

「矢野どの！」

森田が顔を真っ赤に怒鳴った。虫明が涼しい顔でうそぶく。

「我らは、明日にでも死ぬるかという身だ。冥途の土産だと思って楽しんでおけ」

「縁起でもないこと言わないでください！」

もはや二泊する気まんまんの秀家は、にこにここと通りを眺めては、道行く人へ手を振ったりしている。黒田はというと、布団に包まって苦しげに呻いていた。陰気臭いので壁際に押しやって、五右衛門は明晩の宴へとおもいを馳せた。

翌日。昼間は、近所の天満宮に参ったり、店屋をひやかしたりして時間を潰した。暗くなってきたら、いよいよお楽しみである。

ぐずる黒田を叩き起こし、気鬱にはパーツと遊ぶのが一番の滋養だなどと言ってきたせ、無理やり膳につかせた。

「おらんちゃん！」

芸妓たちが座敷へ上がると、虫明が真つ先に例の石川五右子へ声援を送った。芳しき蘭というよりも金山鉄壁の豪傑に近いものがあるが、名前だけは本人の容貌でどうこうなるものではない。

虫明の声援を受け、おらんがニツタリ笑って頭を下げる。他の女たちもそれに倣った。皆が皆、もさつとした詰袖に、さとびた垂髪と化粧。そんなカツペ臭いところが秀家と虫明には新鮮らしく、歌や踊りを大喜びでせがみはじめた。乗り気でなかった森田も、飲むうちに件のおふさ似と打ち解けたらしく、おずおずと手を握っては顔を赤くしている。黒田は黒田で、母ちゃんみたいなオバハンに背をさすってもらい、満更でもなさそうだ。

五右衛門も遠慮なく、巨大唇女の襟へ手を入れる。しつとりした胸元の感触にうつとりしつ横目でうかがうと、秀家は猩猩女の股座へ頭をつつこんでゲラゲラ笑っている。虫明は、恥らうおらんの着物を剥ぎ取ろうと奮闘、本人は素っ裸という思い切りのよさだ。遊びなれているだけのことはある。

そんなこんなで夜は更けた。鯨飲して寝入っていた五右衛門が尿意を催し目を覚ますと、他の四人はそれぞれでんに足を投げ出し爆睡している。女たちはすでにいない。階段を降り、冷え切った通し庭を千鳥足で突っ切って、裏にある便所へ向かった。用を足し終え踵をかえず。そのとき、垣ぎわに植わった楠の側で話し声がす

ることに気づいた。

耳を澄ましてみると、若い男女であるらしい。目を細めて注視すると、ほの赤い雪明りに浮かびあがるのは、さつき部屋で寝入っていたはずの森田であった。五右衛門が首をひねっていると、森田は向かい合った女を勢いよく抱かまえた。女の腕も森田の背にまわる合点。女は、例のおふさ似の芸妓だろう。

ここは大人の配慮でそつとしておくことにして、五右衛門は部屋へ戻った。眠りこける面をよく見てみる。大の字の秀家。壁際には黒田。赤裸の虫明。その虫明の腕枕で眠るのは、なんと件の石川五右衛子・おらんであった。しょうがないのでそれぞれに布団をかけてやってから、五右衛門も横になった。

おらんが、ウンと呻って寝返りをうった。顔からしてとんでもなく寝相が悪そうであるから、明朝には虫明が圧死しているかもしれない。ご愁傷様。

二日酔いでとても歩けたものではないが、出発することにした。

三日も同じ宿に留まるのはさすがにまずい。

吐き気・むかつき・頭痛などと闘いながら、五右衛門はのろのろと身支度をした。同じく二日酔い、その上おらんの下敷きになって半死の虫明が、股引を履こうと片足を上げ、ブツ倒れた。起き上がる気力もないらしい。そのまま身をくねらせ、股引を腰まで引き上げる。横着というか器用というか、横になった状態のまま、着物や帯・脚絆や手甲までをも身につけた。

「何をもちもたしておるのじゃ」

秀家は、平生から大酒をくらって肝臓を鍛えているおかげで、通常運転である。昨夜がよっぽど楽しかったのかえらくゴキゲンだ。鼻歌まじりに、屈伸したり肩をぐるぐる回したり、しまいには駕籠を担ぐ真似をしながら部屋の中を行ったり来たりした。端っこでげっそりしている黒田を見咎め、ぼんと肩を叩く。

「黒田。そちは無理をせずともよい。わしにどーんと任せるのじゃ」

足手まといの黒田は、病人駕籠へ乗せていくことになった。代わりに秀家が駕籠かき人足に扮装する。旅足が早くなるばかりか、いざ身分がバレそうになった場合に、黒田を秀家だと偽ってとんずらすることが出来る。一石二鳥の案だ。幸い、秀家本人も労働に乗り気である。

「早うようなれ、黒田」

「殿にまでご迷惑をおかけする破目になろうとは……」

「よいのじゃよいのじゃ」

「申し訳のうございます」

黒田は目頭を押さえた。痩せた指に涙が伝う。

その涙がすっかり乾いてしまっても、昨夜から出突っ張りの森田は帰ってこない。日が高くなる前に出発しないと、酒病おやじ二人を抱えた一行が、本日中に次の宿へ到着するのは難しくなる。気をもみもみ火鉢を囲んでいると、やがて憔悴しきった森田が戻ってきた。

「何をしておったのじゃ。早う支度をせい」

「あいすみません」

唇を尖らせる秀家へ、森田は頭を下げた。精悍な頬がこけ、目元にどす黒い隈が浮いている。たった一夜で十ほども年をとったように見える。

黒田が、いまだどてら姿の森田へ旅装束一式を手渡した。うつ伏せで寝入ってしまった虫明を叩き起こしつつ、五右衛門は再び森田へ視線をやった。噛み締めた唇が細かく震っている。

「ねえ森田くん」

どうしたの、と訊こうとした五右衛門の目の前を、なにかが高速で過ぎた。それは、今しがた起き上がった虫明の額に衝突する。形のいい目が白目を剥いたかと思うと、虫明は仰のけにどうと倒れた。うつ伏せていたせいで畳の痕がついた額には、握りこぶし大の石がめり込んでいる。呆然とする間もなく、窓から次つぎ投石が襲い来る。

「わー！ なに、なに!？」

「とりあえず避けるのじゃ！」

五右衛門と秀家で、手近にあった衝立で障壁をつくり、部屋の隅へ退避する。よれよれしている黒田と失神した虫明を、森田が引っぱり込んだ。

「ちょ、なにこれ？ どうなってるの？」

「わ、分かりません。徳川の追手でしょうか？」

泣きそうになりながら、黒田は虫明の額にめり込んだ石を引っぺがした。見たところ、頭蓋が陥没するなどといった甚だしい損傷はない。手当てを黒田に任せ、五右衛門は衝立から首を出して様子を窺う。勢いこそすさまじいが、飛んでくる石はさほど多くない。下手人は多くても三人。手口も考慮するに、落武者狩りではないだろう。しかし、ならばなんだと言われれば、首をひねるしかない。まったくもって理不尽にすぎる。

どうすべきか思索していると、旅ごしらえを終えた森田が、脱いだどてらを右の腕に巻きつけ、五右衛門の隣へ首を突き出した。

「森田くん、どうするつもり？」

「雨戸を閉めてきます！」

森田は飛び出した。左手に持った笠を盾に頭部を守り、右のどてらで飛び交う石を弾く。窓まで辿り着くと、投石を受けながらも戸袋から雨戸を引き出し、ぴたりと閉ざした。

あたりがにわかには薄暗くなった。投石が雨戸を打つ音が不気味に響く。ぐずぐずしてはいられない。雨戸を破れないことに焦れた投石犯は、間もなくここへ踏み込んでくるだろう。これいじょう面倒なことが起こる前に、逃亡するにつきる。

五右衛門は、倒れた虫明をひっくり返して、風呂敷包みを背に括りつけてやった。自らも行李こぶしを引っ掴み、転げるように階段を駆け下りる。土間に掛けておいた蓑をひっつかみ、雪靴をつっかけ、通し庭から裏口へ出た。負傷した虫明を背負った森田が木戸を潜ろうとした瞬間、その襟首がものすごい勢いで引っ掴まれた。助ける間

もなく、地面へ引き倒される。

尻餅をついた森田を見下ろすのは、きのう秀家についた猩猩女であつた。

「セツチャン、こつちよ!」

猩猩に呼ばれて表のほうからやって来たセツチャンは、おふさ似た例の芸妓であつた。裏と表を、二人で手分けして張っていたらしい。

二人の女は、他の者には見向きもせず、倒れた森田を引き起こして執拗に小突き始めた。

「アンタ、よくも謀ってくれたわね!」

「誰かれ構わず盛ってんじゃないわよ!」

「いや、そんなことは……ぎゃっ」

弁明しようとした森田のみぞおちへ膝蹴りが入つた。

「さんぴん! ちんかす!」

「穀潰しのシャバ塞げ!」

散散になじられ蹴られる森田を前に呆然としていた五右衛門であつたが、軒下に並べられた漬物石をセツチャンが振り上げたところで、ようやく我に返つた。

「ちよ、ちよつと。どうなつてんのか知らないけど、それはまずいって!」

「暴力は止してくださいーっ」

五右衛門はセツチャンを羽交い絞めにすることに成功したが、半泣きで止めに入った黒田は、猩猩女に跳ね飛ばされた。鼻息荒く森田へ馬乗りになる猩猩の肩を、秀家が掴む。

「やめるのじゃ。このままでは埒が明かぬ」

昨夜つうじたよしみが効いたのであろう。猩猩は秀家の顔を見ると、いったん落ち着いた。その下から這いずりだした森田を、五右衛門が軒下へ正座させる。

「森田くん。どうなつてんの? 昨日の夜、セツチャンと仲良くしてたじゃない」

森田は、頂垂れて力なく語り始めた。

セツチャンの美貌に当てられた森田。セツチャンのほうも、純乎たる森田の若さへ好意を持った。宴がはけたあと、宿に近い天神さんで逢引をし、罰当たりなことにそのまま境内で色色やつたらしい愛を誓い合つて別れ、旅籠の裏木戸へと森田は戻った。

そこで待つていたのが、猩猩女である。秀家に酌をしたものの、それはただの仕事。本当は一目見たときから森田のことが気になっていた、と告げた。彼女の健気さにクラリときた森田は、思わずその場で猩猩を抱擁した。厠へ立つた五右衛門が目撃したのは、この場面だったのだ。

その後、またもや天神さんにて交接。明るくなり、手を取り合つて別れを惜しんでいる二人を、寝付かれず散歩に出たセツチャンが発見した。事情を察するやいなや掴み合いのケンカを شدしたセツチャンと猩猩であつたが、女二人のドつきあいに恐れをなし逃亡しようとした森田を前に結託。森田へ詰め寄った。

お人よしの森田は、どちらのことも憎からず思つていたのだが、こうなつては敵わない。持てる力を振り絞つて、なだめ、すかし、言いくるめて、宿へ逃げ帰った。

とうぜん納得のいかないセツチャンと猩猩は、置屋へ帰つて戦ごしらえをする。着物の褌を帯に挟んでお端折りにし、鉢巻を締めて、襷をかける。石を拾いながら森田の滞在する旅籠へと向かった。

あとは周知の通りである。

「最低でございます」

突き飛ばされて打ち身をこさえた黒田が、恨み顔で言った。すみません、と森田は肩をすぼめる。

「若気の至りとはいえ、酷なことをしたのう」

秀家は大气であるので、自分のお気に入りに手を出した森田を責めるようなことはしない。正座する森田の腕を引いて立ちあがらせ

た。土埃に汚れた森田の尻をはたいてやりつつ、きつとまなじりを決する。

「こうなった以上、我らに出来うることはひとつだけじゃ」

森田・黒田・伸びた虫明を順に見る。二人の女へ視線をやってから、五右衛門に目配せをした。五右衛門は黙って頷く。秀家も頷いた。

大きく息を吸って、

「逃げるのじゃー！」

女たちが怯んだ隙に、五右衛門は虫明を抱え上げ戦線から離脱した。後ろからは、森田と黒田の手を引いた秀家が、暴れ牛の様相で駆けてくる。数拍おいて、おぞましい叫びをあげる女たちが追いかけてきた。

五右衛門は二日酔いを、黒田は気鬱を、森田は自らの為した悪徳を忘れて、ひたすらに遁走する。ここは全力でトンスラこくしかない。後ろから投擲される石やら桶やら野良猫やらを避け、かわし、時にはくらくらいつつ、駆けに駆ける。

「も、もう限界！」

「がんばるのじゃ五右！」

虫明を担う五右衛門が弱音を吐くと、秀家が手を貸してくれた。

森田も加わり、高く掲げられた虫明はみこしみたいな状態で運搬される。半泣きの黒田が、遅れまいと必死で追いつがる。

往来に行く人人が、振り返って指をさした。

物取りとわたし

所詮は女の足である。走りに走っておおよそ一里（約四？）。杭いせがわ瀬川ちかくまで来たところで完全に巻いたようだった。振り返ってみても追っ手の姿は微塵も見えない。

ここまで来れば、本日の目的地である赤坂宿は目と鼻の先である。体力が限界に近いこともあって、道際の小陰で一息つくことにした。目を覚ました虫明へ、五右衛門は水筒の水で濡らした手拭いを差し出してやる。

「いったい何が起こった」

虫明は、長い指で手拭いを折り返しつつ顔についた埃を拭う。投石をくらった額がみつともなく腫れ始めていた。触れると痛むらしく顔をしきりにしかめている。

五右衛門が一切を説明すると、虫明は不機嫌に鼻をフンとやった。「いいか森田。女と面倒を起こした場合はな」

「はい……」

森田はさっきの騒動がよほど身に応えたらしく、正座してしょんぼりと聞き入っている。

虫明が薄い唇の端をツイと吊り上げた。

「張り倒しても、埋めても、爆破しても、とにかく何でもいい。自分で始末をつけろ」

「ちよつとちよつと」

剣呑なほうへ向きはじめた講釈を、五右衛門は遮った。

「虫明さん、女の子にはいつも優しくしてるじゃないの。森田くんに嘘おしえちゃダメでしょ」

「偽りなど言っておらん。ことが問題なく運んでいる場合は、調子を合わせて楽しむべよい。しかし世の女は己の利にならぬと分かっただとたんに冷酷なまでの仕打ちをする。そうなる前に、こちらから

見切りをつけるべきだ。拘泥は禁物。迷わず排除しろ。わかったか」「はい……」

大人しく聞き入る森田を横目に、五右衛門は秀家に耳打ちする。

「虫明さん、あんなこと言ってるけど」

「女房に三度も逃げられておるゆえであるの」

「うわ。それはキツイね」

「おまけに、若いころはえろう肥えておって、おなごどもにずいぶん袖にされたそうじゃ。わしも、幼きころ目にした虫明の姿を臍気ながら記憶しておる」

「どんな感じだったの？」

「練馬大根。河豚の横とび。背比べなら横でこい、といった感じかの」

「うーん意外」

虫明の屈折した女性観にしみじみとしたものを感じる五右衛門であった。ゲテモノ好きなのも、なんとなく納得がいく。

虫明先生の人生論が一段落したところで、そろそろ出発しようということになった。

だがここに来て、ひとつ困ったことがあった。手荷物は持ってきたものの、駕籠を旅籠へ置き捨ててきてしまったのだ。

「私は問題ありませんが……」

黒田はすっかりとした足取りで歩を進めている。衝撃・緊張の連続がよい方向へ作用したらしい。死に掛けたヘラブナに塩を揉み込むのと同じ要領である。

五右衛門は、干からびたような黒田の背をどんと叩いた。

「黒田ちゃんが平気ならいいんだけどさ。ただ、関所をどうやって通るかだよな」

そもそも病人駕籠を用意したのは、関所で咎められたさいに病人を京の医者へ連れて行くという言い訳をするための工作だったのだ。「旅の目的を尋ねられても、答えられんな」

虫明が頷いた。額に濡らした手拭いを巻いた姿が出店のおやじ

みたいだ。それを見た森田が、口に手をやって笑いをこらえつつ意見する。

「とりあえず行楽と言っしかないのではないのでしょうか」

「面倒くさいのう。名乗って通つてしまえばよいではないか」

「お殿さま、それ本気で言ってる？」

のんびりと評定を繰り広げつつ、よく晴れた往還を進む。白樫村から三里（約十二？）ほどしか離れていないのに、このあたりはいぶんと温かい。雪も日陰に薄く残っているだけで、往来にはない正月のしめ飾りを売りに行く農民風が、五右衛門たちを足早に追いつ越していった。人影はまばらだ。

「あれ？」

半里（約二？）ほど進んだところで、五右衛門は違和を覚えた。

右手後方、路肩の茂みに人の気配があるのだ。

皆も気づいたようで、それぞれに來た道を振り返ったり、首をかしげたりしている。

歩きながら顔を寄せる。黒田が口火を切った。

「ま、まさか……追いつかれたのでしょうか」

「ちようどいい。森田、先ほど教えたことを実践してこい」

柄袋のかかった脇差を虫明から渡され、森田は青い顔をする。

「そ、そんなことはできません！」

「虫明さん、からかつちゃダメじゃない」

「森田は青いのう」

「いや拙者は本気」

などとやっているうちに、気配は真横まで迫った。もはや隠そうともしていない。枯れ草を踏み分ける音が大胆に聞こえてくる。立木の間に武装した男の胸がちらと見えた。

「す、すす……助っ人を雇ったのでしょうか」

黒田が怯えて、またぞろ胃を押さえ始めた。その背を軽く叩いて励ましつつ、秀家は首を横へ振る。

「あのおなごどもにそのような甲斐性があるとはおもえぬ。これは」

「追い剥ぎ、か」

先ほど森田へ渡そうとした脇差を、虫明は抜いた。刃がキラリと光る。五右衛門たちも各自、懐刀や小刀を握った。目配せをして頷きあう。

気配がするのは反対側、川沿いに立ち枯れた葦の間へ、一気に突っ込んだ。

ぬかるんだ葦原を抜け、四間（約七m）ほど先に見える砂地で迎撃する構えだ。腰を据えて戦えばいくらかは有利になる。枯れ葦に遮られているから、通行人に騒がれる心配も少ない。泥濘に藁沓をとられながら、もがくように走る。

「ぎゃっ」

泥が派手に跳ね上がった。秀家が転倒したのだ。五右衛門が見やると、秀家の足首にはごつい指ががっしりと巻きついていていた。

賊の一味が、あらかじめ葦原に伏せていたのだった。はなから挟み撃ちにする気だったらしい。

「殿！」

虫明が賊へ斬りつける。あっさりかわされた。太い腕がひるがえったかとおもつと、秀家の首がぎゅうと締め上げられた。息苦しさに空をかいた手から小刀が落ちる。拾いあげた賊は、それを秀家の顔面へ突きつけた。

「動くなよ」

追っついて来た賊の低い声がうしろからかかった。五右衛門たちは動きをとめ、目玉だけをぐるりと回しあたりをうかがった。

総勢で十もいようか。逃げるだけなら何とかかなるかもしれないが、秀家が捕らえられている。大人しくするしかなかった。

賊の一人が、黒田の肩を掴んだ。

「おまえら、ずいぶんと金持ちじゃねえか」

「かかか、か、金など……」

黒田は半泣きになりながら後ずさった。

「あんだだけ派手に遊んどいて、よく言うぜ」

秀家を捕らえている男が嘲った。蓬髪にモジャ髭。戦場の死体から剥ぎ取ったような汚い胴丸を身につけている。

あれはかなり臭うんじゃないかな。秀家を見てみると、案の定、鼻がもげそうな顔をしている。

そんなのはおかまいなしに、賊は脇差の腹で秀家の頬を叩く。

「大方、どつかの本店のお忍びだろうが。なあ、若旦那よお」

気丈な秀家は、悪臭にもめげず鋭いすがめで賊を睨まえた。

「きさま、わしを誰じゃと思うておる。わしこそは、備前岡山四十七ま……」

「わーっ！」

五右衛門は置かれた立場を忘れて、秀家の口を塞ぎにかかった。横に控えていた賊に一撃されあえなく撃沈。

虫明・森田・黒田の三人も、なすすべなく後ろ手に捕らえられた。「てめえがだれだろうが構わねえんだよ。身につけたもん出しな。ふんどしまで全部だ」

なんとという非情さ。こんなところでふりちん晒したとなっては今後生きていけない。

もじもじしていると、捕らえられた秀家の首を刃が薄く裂いた。

「きさまっ！」

森田が飛びかかろうとしたが、腕をキメられては如何ともしがたい。ねじ伏せられ、顔面から地へ叩きつけられた。鼻血が噴きでる。

「森田どのー！」

「動くんじゃないええ」

足を払われ黒田も転倒する。ひゃあ、という情けない叫びがあがった。

「素っ裸になつたつて構わねえだろ？ 芸者のねえちゃんに甘えさ

せてもらやあいいじゃねえか。なあ、色男」

美貌ゆえ標的にされた虫明は、エビ責めにされたり、口に石ころを詰め込まれたりと最悪である。虫明は気丈ゆえ無様な態度はとら

ないものの、鼻の脇を脂汗が伝っている。

五右衛門は自らの不細工さに万謝した。だが、感謝しようが祈祷しようが、事態がよくなるわけではない。南無三ここまでか。全裸で往來の物笑いとなる覚悟をした。

そのとき、頭上で風がうなつた。

同時に、賊が二、三人ふっ飛ぶ。何だと思つ間もなく、またうなり。地に伏した五右衛門が目を中空にやると、丸太が凄まじい勢いで横様に通過していくところだった。思わず首をすくめる。うなり。悲鳴。うなり。

やがて、静寂があたりを支配した。

「だいじょうぶ？」

鈴のような声がした。

顔を上げた五右衛門の目には、丸太を片手にぶらさげた、石川五右子・おらんの姿が映った。

この女、見た目から乖離しまくった可憐な声の持ち主であったのだ。ちなみに、琴も三味線も歌も皆伝並みに上手い。昨夜は一同手放して賞賛したものだ。

座敷での彼女とは違つのは、なぜか男のナリをしているところだった。

「相すまぬ。助かった」

秀家が、裂かれた首筋を手の平で押さえながら立ち上がった。黒田が駆け寄る。大事ないとわかると、黒田は、失神した賊どもを緊縛する森田へ手を貸しに行った。

「虫明さん、平気？」

五右衛門は、妙な具合に捻じ曲がった虫明の関節を解してやる。よほど痛むのであろう。顔を歪めた虫明は、緩慢な動作で半身だけを起こし、口に詰め込まれた石を吐いた。左の犬歯が割れて血が流れている。五右衛門は、竹筒の水で口をすすがせてやった。

「おらん。どうしたのだ」

止まらぬ口中の血に顔を擧めつつ、昨夜とは一転、すげない口調

で虫明は尋ねた。釣った魚に餌はやらない主義らしい。

助けてもらっておいてこの態度はないだろうに、と五右衛門はおもったが、おらんは頬を染め、恥ずかしげに身をよじった。

「忘れ物を届けに来たの」

おらんは、丸太の他に竹カゴと筵むしろを抱えている。さきほど賊をなぎ倒した丸太は、五右衛門たちが宿に放置してきた病人駕籠のなげえだったのだ。

「それに……わたし、あなたと離れたくなくて……」

短いまつ毛のまばらに生えた脛を、恥ずかしげに伏せる。

風体は化け物であっても、おらんは女である。置屋から逃げ出すのは、身を切るような覚悟がいったであろう。虫明を思う気持ちは本物であるに違いない。五右衛門はジンとした。黒田は感動のあまり嗚咽を漏らしている。目頭を押さえる森田の背を、秀家が優しく叩いた。全員が、固唾を呑んで虫明の言葉を待つ。

「邪魔だ。帰れ」

高い鼻梁に皺を寄せ、虫明は吐き捨てた。犬齒から流れる血で赤く染まった手拭いを手に、一行へ背を向ける。葦間を抜け、川岸へと消えた。

唇を噛んで耐えていたおらんであったが、虫明の後ろ姿が見えなくなつた途端、ワツと泣き伏した。

「なにあれ、ひつど!」

「人非人でございます!」

「嫁に逃げられるはずじゃのう」

五右衛門・黒田・秀家は、川岸へ向かつて石を投げる。泣き濡れるおらんの広大な背を、森田がさすってやる。

きけば、おらんはまだ十七歳。森田、そして五右衛門の娘おふさと、そう変わらない。身寄りがなかったため、置屋では相当ひどく扱われていたらしい。おまけにこの見た目である。優しくしてくれた男は、虫明が初めてだったそうだ。

これが怒らずにいられようか。五右衛門は、葦を踏み分け川ぎわ

へ向かった。

「ちよつと虫明さん。おらんちゃんが可哀相じゃない」

虫明は顔を洗っている最中だった。絞った手拭いで口元を拭いつつ、おもむろに振り向く。形のいい顎の先から雫が落ちた。

「連れてはいけん」

「そりゃあ、ちよつとは大変だろうけどさ。あの格好なら、いつしよに旅したって構わないじゃない」

「あの女に、我らの身分を明かすのか？」

ぐ、と五右衛門は詰まった。たしかに、おらんを同道させれば、彼女にこちらの身の上を隠し通すのは困難だ。しかしここで突き放せば、おらんの行き場はなくなる。

「駕籠を届けてくれたんだし、信用できるんじゃない？ こっちのこと教えても大丈夫だとおもうけど」

「途中で逃げられでもしたらどうする。公儀へ垂れ込みに行くぞ」

「そんな子じゃないでしょ」

「女なんぞ当てにはならん」

虫明は、ふたたび水際へ屈みこんだ。手拭いに染みた血は靄のように流れへ広がり、すぐに消えた。

虫明の言うことはもつともだった。秀家のことを一番に考えるならば、身元の不確かなおらんを連れて行くのは危険である。五右衛門には、抗する言葉がみつからなかった。

背後で葦を押し分ける音がした。秀家と黒田が顔を出す。

「おぬしの忠義と深慮はありがたいがのう」

言った秀家へ向き直って、虫明は膝をついた。見下ろす秀家は、噛んで含めるように、ゆっくりと話す。

「人として、あの娘を見捨てることはできぬ」

「短慮が過ぎますぞ、殿」

「おぬしがついておるのじゃ。娘の一人や二人、どうということはあるまい」

後ろから黒田も口を添える。

「幸い、おらんどのは豪力無双にございます。足手まといになる」とはありません」

「見てくれの印象も凄まじいものがあるしう。連れて歩けば、賊に襲われることもあるまいて」

秀家が、明るい声で笑った。

渋い顔をする虫明の肩を、五右衛門はぼんと叩いた。

「お殿さまも黒田ちゃんもこう言ってるし。ね、虫明さん」

五右衛門の手を払いのけ、虫明は両手を地についた。

「殿がそうおっしゃるのであらば」

「よう言つた。早う戻っておらんに告げてやるのじゃ」

につこり微笑み、秀家は虫明を促した。もういちど頭を下げて、

虫明は川岸から離れた。

五右衛門は小さく舌を出した。

「虫明さん、あれでけっこう喜んでたりして」

秀家も、ニシシと笑った。

「悪ずれたように見えて、不器用なだけかもしれぬのう」

「丸くおさまって、ほっとしました」

黒田も嬉しそうだ。

汚れた顔と手を川の水で洗う。身を切るような冷たさが、今は逆に心地いい。蓑や笠についた泥は、濡らした手拭いでぬぐう。最後に水筒へ水を汲みなおしてから、五右衛門たち三人も、森田とおらんのもとへ戻った。

「殿！」

森田が、安堵をあらわに駆け寄ってくる。賊の暴行で流れた鼻血のこびりついた口元をにつこりと綻ばせ、背後の二人を指した。虫明は、相変わらず苦虫を噛んだような顔をしている。

見つめるおらんは、もう泣いていない。

激臭とわたし

陣笠の下つ端役人が忙しく辻を曲がっていった。一人だけかと思つたら、後に四、五人も連なっている。なにか変事でもあつたのだろうか。

すれ違つた五右衛門は肩をすくめて、隣に並んだ秀家を突つついた。

「なんか、すごいものものしいね。おれたちが垂井の関所を通れたのって、もしかして奇跡だった？」

「そうかもしれないのう」

秀家は被つた笠をひよいと傾げ、鬢へ小枝を突つ込んでぼりぼりと掻いた。

白樫を発つて通算四日目。今朝がた赤坂を出て、昼前に垂井へ着いた。

垂井宿の入りには臨時の関が設けられ、徳川方の役人がギッシリ詰めていた。

しかし、時は年末だ。関所内は芋を洗うような有様で、詮議はかなり甘かった。陰気な病人駕籠を抱えた一行が厳しく吟味されることはなく、あっけなく通ることができた。身構えて臨んだだけに、一同ひょうし抜けである。

昼からも行程は順調に進み、結果、未の刻（午後二時）には無事に関ヶ原宿へ到着することができた。日没までまだ時はあるが、無理に行程を進めることもない。早めに宿をとることにした。

そんなわけで現在、適当な旅籠を求め徘徊中である。

五右衛門は、先頭に行く病人駕籠へ目を向けた。

「明日は不破関ふわのせきでしょ？ 黒田ちゃんの病人作戦じゃ苦しいかもし

れないね」

旅の途中で詮議を受けた場合は、黒田を病人に見立て、京へ医者を訪ねるといふ口実で切り抜けることになっている。

「上方に医者を知り合いなんぞおらぬしう。詮索されたら、一発でおしまいじゃ」

秀家が腕を組んでうなる。後ろを歩く虫明が、すかさず手を上げた。

「拙者、産婆・おろし屋の類ならば何人が存じておりますが」

「私が妊婦に見えますか？」

駕籠の中から黒田が冷たく言った。ながえの後ろを担った森田も、軽蔑の目で振り返る。

「だいたい、何のための知り合いなんですか」

「一から説明せねば知解できぬとは、きさまは情けない男だ」

「そんな知り合いのいる男のほうが情けないですよ。とにかく、おらん……いえ、蘭兵衛どのの前で、そんな話をするのは止めてください」

森田とともに駕籠をかく蘭兵衛ことおらんは、振り返って微笑み、首を横に振った。「気をつかわなくても大丈夫」と言いたいらしい。おらんの町中での発話は一切禁止されている。肩幅二尺半（約七五？）身丈六尺（約一八〇？）の巨体から鈴のごとき声が発せられるさまは奇怪きわまりなく、道行く者から余計な勘繰りを受けかねないからだ。

「不便ではあるうが、京に着くまでの辛抱じゃ」

秀家がそう声をかけると、おらんは前歯の欠けた口元をほころばせ、またにつこりした。

評定をしながら歩いていたのがいけなかった。

気がついたときには、一行はいかにも風紀の紊乱した裏小路へ入り込んでしまっていた。

健全そのもの大通りとは違い、この通りには屋根の傾いだ苦屋

やら怪しげな酒場やら違法脱法どんとこいな商店やらが軒を連ねている。路上には反吐・生ごみ・人糞などが散乱しており、不潔なと甚だしい。人心も荒みきっているらしく、まだ日が高いというのに側溝へ頭をつっ込んで寝ている酔っ払いがいる。

さらに、すぐその辻では恐喝が発生していた。気の弱そうな丁稚らしき男が、五、六人のもがり者にたかられている。

秀家が目を輝かせて身を乗り出した。

「すごいおう。恐いのう。わしは、カツアゲというのを生まれて初めて見た」

「おれらも、きのう街道で身ぐるみ剥がされそうになったじゃないの」

五右衛門は思い出すと身が震えた。

森田が肩からながえを外す。

「助けに行つてきます！」

横転した駕籠から転げ出た黒田を踏みつけ、飛び出していった。

「ちよつと！ 危ないつてば！」

五右衛門が叫んだときには、森田はチンピラ其ノ一の後頭部へ拳骨を叩き込んでいた。突然の闖入者にゴロツキどもが色めきたつ。

多勢に無勢。かてて加えて、相手はいかにも喧嘩慣れしている風だ。それぞれの腰には段平たんひらまで差している。脇差一本の森田が太刀打ちできるものではない。

「わしが助太刀するぞい！」

「駄目だつてお殿さま！ 怪我したらどうすんの。虫明さん、森田くんに加勢してあげて！」

秀家を羽交い絞めにしつつ、五右衛門は怒鳴った。事の成り行きを傍観していた虫明は、ひとこと

「余計な怪我をする趣味はない」

と言つて腕を組んだ。さすがは嫁逃しの薄情者である。感心している暇も虫明を説得する暇もないので、五右衛門はおらんにすぎた。

「ごめん、蘭蘭が行ってあげて！」

力強く頷き、おらんが駆け出す。黒田がまた踏みつけられた。

「わしも行くのじゃ！」

「だめだつたら！」

五右衛門は一喝して、秀家の脇を強く締めあげた。

そこへ突如、異臭がおそった。鼻をつく、というような生易しいものではない。死人が出る水準の激臭である。現に、地べたに這っていた黒田は、泡を噴いてのたうちまわりはじめた。

五右衛門・秀家・虫明の三人は、とつさに袖で鼻口を覆った。かすみゆく目で、襲い来る臭気の元を辿る。

彼方の辻から男が姿を現した。ボロ布と化した羽織と股引の上へ泥だらけの胴丸をつけている。蓬髪のかかった頬がげっそりと削げ、目つきの鋭いさまは、餓えた野犬を想起させた。足取りはふらふらと弱っているものの、むき出しになつた手足は常人よりもはるかに太い。

男は、あまりの臭気に争うことを忘れた森田・おらん・チンピラたちへヨロヨロと近づいていく。立ちすくむ彼らの前で立ち止まると、手にした棒切れを振り上げ、とつぜん暴れだした。嗅覚が破壊され虚ろとなつたチンピラの脳頂へ、棒切れが打ち下ろされる。頭蓋が弾けて、ぼんと鳴った。

辛うじて意識のある森田が、虚脱したおらんと丁稚男を突き飛ばして地に伏せさせた。その頭上で、ちぎれた耳やら頭皮やらが乱れ飛ぶ。

チンピラどもをひとしきり伸すと、激臭男は倒れた男たちの懷を暴き始めた。金目のものを漁っているらしい。運よく身体の破壊を免れたチンピラが、漏らした小便の筋を延ばし延ばし這い逃れていく。

森田はおらんと丁稚の手を掴み、半ば引きずるようにして戻ってきた。へたりこむ丁稚をよそに、宇喜多一行はちぎつた花紙を鼻へ詰め、堀の陰から激臭男の動向を見守る。

「な、なんなんでしょうか、あれは」

激臭と恐怖を間近で味わった森田は、顔が真っ青である。

「拙者、肥溜めに落ちたことがあるが、これほどの臭気ではなかったぞ」

「なんでそんなことになったんですか……」

「人間、四十を過ぎればさまざま事態が出来るものだ」

「最近のことだったんですか！」

呆れ顔の森田をよそに、虫明は長い指を折って激臭の正体を考えるるかぎり列拳しはじめた。

「乞食、山伏、変態、瘋癲、落武者……」

「落武者？」

一同は顔を見合わせた。

関ヶ原で合戦があったのは長月の中旬である。あれから三月もの間、こんな近場をうろついている落人がいるとはおもえないが、怪我や病気、またはそうした状態にある仲間を抱えているなど、なんらかの事情があつたとも考えられる。

堀から身を乗り出し、男の身なりに目を凝らす。汚れ放題であるため、具足の色格好はよくわからない。

人一倍目のいい秀家が、激臭男の腰に括りつけてある陣笠を指差した。

「む。あの紋は……」

「見覚えあるの？」

五右衛門は陣笠へ目を凝らした。やはりよくわからない。

秀家が小さく頷く。

「うむ。あれは」

「きやつ」

失神した黒田の鼻へ花紙を詰めてやっていたおらんが、小さな悲鳴をあげた。

その指差す先で、死体を漁っていた激臭男がぶっ倒れていた。

森田が陣笠へ手桶で水をかけた。五右衛門が手灯台で照らす。泥が流れたあとに現れたのは、やはり？ 兒？の紋であった。頷きあい、井戸端から離れる。秀家たちの待つ庫裏へ戻った。

「やはりそうであったかの」

困炉裏へ屈みこんだ秀家が、深々と頷いた。

開け放った雨戸の向こうでは、おらんと黒田が、炉で沸かした湯を激臭男にぶっかけている。さらにその先、宵口の境内は夕靄に薄ぼんやりと霞んでいた。

飢餓に倒れた激臭男を回収し、一行は宿はずれの破れ寺へ腰を落ち着けた。寒気の只中で廃屋などに泊まりたくはないが、チンピラ殺しの下手人を抱えた一行が旅籠へ泊まるわけにもいかない。

「我が軍の残兵であったとはな」

激臭から剥ぎ取った胴の表面を虫明が撫でた。こちらにも、べつたりとへばりついた泥ごしに？ 兒？の合印が読み取れる。

兒の字は、宇喜多家の紋である。戦場で敵味方を区別するため、足輕に支給する貸し具足にも、この紋が打ってあった。

縁から戻ってきたおらんが、激臭を炉辺へ寝かせる。

「三月も山中であつて、きつとすぐく不安だったんでしょね」

乾いた手拭いで、濡れた肌を優しく拭ってやっている。丁寧に洗っただけあつて、あの激烈な臭気はほぼ治まっていた。

黒田が、珍獣でも拝むような目つきで激臭男を見やった。

「この雪ですよ……にわかには信じられません」

「おれなら三日でくたばる自信あるよ」

五右衛門も激臭男をまじまじと見た。

偉丈夫である。背丈はおよそ六尺（約一八〇？）。もつれた総髪も、眉尻の切れ上がった眉も、猿のような赤茶色をしている。瞼は閉じられているが、落ち窪んだ目玉は開けばギョロりと大きいに違いない。肌の張った若い顔は、不動明王のごとき猛猛しさを備えていた。

虫明が、ゆつくりとあたりを見回した。

「静かすぎるな」

日が落ちたばかりだというのに、廃寺の外は深更さながらに深と
している。

ぶじ這い逃れたチンピラが仲間の元へ駆け込めば、とうぜん報復
に乗り出してくるだろう。廃墟や裏町を庭とする輩のことだ。息を
潜めていたところで、発見されるのは時間の問題だった。

「嵐の前の静けさでしょうか」

森田が小さな息を吐くと、秀家は深く頷いた。

「今宵は用心が必要そうじゃの」

そう言った秀家が、一番に寝入った。

しよすがなく、虫明・森田・五右衛門が、交代で不寝番を張るこ
ととなる。

夜更けになり、廃寺には寝息が響くばかりである。一番で不寝番
を引き受けた五右衛門は、あくびを噛み殺しつつ小さくなつた囲炉
裏へ樺の枝を放った。ぱちん、と音がする。それに反応したかのよ
うに、昏睡状態にあつた激臭がとぜん立ち上がった。炉辺に下ろ
してあつた鍋から粥の残りをすすり、ぱり、と床板を素手で一枚ひ
っぱがした。獣のような俊敏さで、土間から外へ飛び出す。

小枝片手に五右衛門はあ然とした。

「なに、あれ……？」

「寝ぼけていたのでしょうか？」

「その割には飯を食っていったぞ」

身を起こした森田と虫明もあんぐりしている。おらんと黒田も目
をぱちくりさせた。

「うん？ もう朝かのう？」

最後に起き上がった秀家がウーンと伸びをしたところで、凄まじ
い咆哮が轟いた。

境内だ。

争う音、声、そして血なまぐさい臭いが夜風につれて流れてくる。
雨戸の隙間から外を覗いた黒田は、歯をがちがち鳴らし、半泣き

になった。

「ゴ、ゴロツキどもが仕返しに……すごい数です！ それを、激臭が片っ端からなぎ倒して……ぎゃっ」

雨戸が室内へ向かつてふっ飛んだ。下敷きになった黒田の顔には、血糊がベツタリとへばっている。慌てておらんが駆け寄る。黒田本人の血でないことは、すぐにわかった。

倒れた戸板の上には、頭蓋を粉碎されたゴロツキらしき男が、仰のけに乗っかっていたのだ。

飛び出た目玉が転がってくる。秀家がつまみあげた。

「変わった饅頭じゃのう」

「寝ぼけてる場合じゃないでしょ！」

五右衛門は、齧ろうとする秀家を引つ張って板間の奥へ退避する。森田は破れた雨戸の前へ、虫明は外へ続く土間の側へ、それぞれ脇差を抜いて立った。同じく臨戦態勢のおらんは、恐るべき怪力で柱を一本へしおり、脇へ手挟む。戸板の下で腰を抜かした黒田を引きずり出して五右衛門へ預けると、森田といっしょに雨戸の脇で身構えた。

境内の真ん中では、激臭男が凄まじい形相でチンピラをぶん殴っている。大刀を振りかぶったチンピラの顔面へ手にした床板を叩きつける。賊の鼻柱が陥没したと同時に、床板は真つ二つに割れ飛ぶ。燕のごとく飛んだ破片が、別のチンピラの喉首に穴を空けた。

激臭にかかりきりだったチンピラどもが、宇喜多一行を振り向いた。つぎの瞬間、板間へどうと雪崩れ込んでくる。

おらんが飛び出し、縁へ足をかけた敵を柱で横薙ぎにする。討ち漏らした輩を、森田が片っ端から突き殺す。おぞましい咆哮と血煙で、あたりは真つ赤になった。

一方、土間へ回り込んできた敵の喉首を、虫明の脇差が突く。咽喉を掻き穿る指から落ちた大刀を拾いあげ、続いて迫った三人を斬り伏せた。そのうちの一人が取り落とした手槍を、虫明は五右衛門へ蹴って寄こした。構えなど知ったことではない。虫明の脇を抜け

た一人を、えいやと五右衛門は突いた。眉間。チンピラはどうと倒れた。

一息つく間もなく、さらに三人ほどが襲い来る。斬り合い突き合いに不慣れな五右衛門には、絶対的に不利だ。慌てて壁際まで後しざった。

そこで待ち構えていた秀家が、焼けた火箸で敵の足を突く。黒田は、チンピラどもの目玉めがけて灰を投げつける。二人の援護を得た五右衛門は、穂先で敵を殴り倒した。

一心に槍を振るっていた五右衛門であったが、気がつけば、目の前には二十体ほどの敵が横たわっていた。抜けた床板から、床下に向かつてぼたんぼたん血の滴る音がする。森閑となったあたりに、痛いくらいの音であった。

助かりそうにない者へ、虫明がトドメをさして回る。我に返った森田が、縁から境内へ降りた。

「大丈夫ですか」

激しく胸を上下させていた激臭は、声をかけられても、しばらくはただ荒い息を吐くのみであった。

「……あんたらは」

甲高い声だった。

ガクガクする足を励まして、五右衛門も境内へ降りる。

板間からもれる囲炉裏の灯で、激臭男の顔がきらきらと浮かびあがっている。汗に濡れた蓬髪がこめかみに張りつき、唐草に似た滑稽な渦を巻いている。興奮しきった目は油をひいたように光り、返り血に染まった厚い唇はきつく引き結ばれていた。

「これだけの敵を、よく一人で片付けたものだ」

遅れて境内へ下りた虫明があたりを睥睨した。枯れ草の揺れる境内には、ざっと十五人ほどが倒れている。顔面や腹部を爆跳させ、一見したところ、息のある者はいない。

死体からくすねてきた刀を、おらんが皆に分配する。受け取って、虫明は一振りし手溜りを確認した。

「手際を褒めてやりたいところだが、そう悠長にもしておれん。人が来たらやつかいだ」

「落ち着けそうなところを一箇所だけ知っている。ついてきてくれ」
激臭は、板間へ上がり持参の大小を回収すると、後ろを振り返りもせず歩き始めた。

大きな雪の片が、ひとつ。ふたつ。やがて無数に舞い落ちはじめる。

「アンタ、宇喜多の殿さまだろ」

激臭男の言葉に一同ぎよっとした。

宿はずれの辻堂は、古く狭い。案内した激臭男が言ったとおり、あたりはひっそりとして人どころか虫の気配すらなかった。雪まじりの風が巻くひょうひょうという音だけが、時おり思い出したように響く。中央に設えた灯台を囲む顔は、どれも寒さに強張っていた。当の秀家が、あたりはばかりからぬでかい音で鼻をかんだ。

虫明がはっとして、鋭い目で激臭を睨む。

「なぜ、そう言える」

チンピラの死体から剥ぎ取った着物の襟を掻い込み、激臭は鼻で、へっと笑った。

「貸し具足みただろ。おれが宇喜多軍で兵卒やったの知ってんだろ
うが」

「それは知っている」

虫明は、使用済みの花紙を床板の隙間へ押し込んでいる秀家をかばうように、体を前へのり出した。

「我らを見て、なぜ宇喜多一行だと判断したのかと訊いている」

「そんなに丁重に扱ってりゃ、だれが見たって分からあ」

激臭は鋭い犬歯を見せて笑い、顎をしゃくった。その先では、しつこく花紙をいじっている秀家の足先を、黒田が揉んでやっている。虫明が大刀の柄に指をかける。

激臭は、待った待ったと手を振った。

「冗談だよ。おれ、その殿さまの顔みたことあんだ」
「人違いだ」

「隠さなくつてもいいだろ。おれ、アンタやそっちの兄ちゃん、それに、こっちのアンタの顔も知ってるぜ」

虫明・黒田・森田の顔を、激臭は順繰りに指した。

「下つ端の位置からじゃ、ゴマ粒ぐれえにしか見えねえけどな。おれ、目はいいんだ」

「獣なみの眼力ですね……。山中で三月も生き延びられるのも納得です」

黒田が溜息を吐いた。森田も、力なく首を横へ振る。

「虫明どの。正直に話しましょう」

忌忌しげに虫明は眉根を寄せた。秀家の前へ乗り出していた体を元へ戻す。やおら腕を組んだ。

「とりあえず、名を名乗れ」

「アンタ、態度でかいよな」

「名乗れ」

今度は、激臭が溜息を吐いた。すらすらと名を明かす。

「美作国は讚甘庄宮本村の、新免弁之助だ」

「新免？ 新免宗貫の縁者か？」

虫明は、片方の眉を上げた。

話がよく分からないので、五右衛門は隣の黒田を突つついた。

「ねえ、黒田ちゃん。新免なんとかつて、だれ？」

「私もよく存じてはいないのですが、以前、宇喜多家の家臣だった戸川どのの配下に、そのような方がいらしたような気がします」

平たく言えば、侍大将の親戚ということらしい。

灯台の火を受けて、弁之助の髪は稲穂のような金色に染まっている。目を凝らすと、総髪にした頭頂部の髪が灯りに透けて、吹き出物の痕みみたいな醜い傷が見えた。これでは月代は剃れない。

「縁者……まあ、そんなところだ」

弁之助は言葉を濁したが、虫明は詳しく突つ込まなかった。兵卒

には、うさん臭い奴や後ろ暗い奴がごまんと混じっている。いちいち気にしてはきりが無い。

森田が片手を上げた。

「新免どのは、なぜ三月も山中に籠もっていたんですか？ あれほどの腕があれば、残党狩りから逃げ切ることもできたとおもいますが」

おだてに弱いのか、弁之助ははにかんだ。単純に、年の近い森田に好感を持ったのかもしれない。

埃の積もった床をごつい指でなぞり、弁之助は太い線を一本描きつけた。

「これが街道だろ。手前が、さつき暴れた関ヶ原宿。んで、ここが現在地だ」

地図の真ん中を、とんとんと指先で叩く。

「もうちつと先へ行くと、不破関だ。とつくの昔に潰れちまった関だが、三月前の戦が終わってからは、落人を狩り出すための関が臨時に張られてる」

不破関の位置へ、×印がつけられた。その指で弁之助は、街道に平行する細い線を描いた。

「相当な難路にやちげえねえが、こうやって山伝いに行きや、関を通らずに西へ抜けることもできる」

「なぜ通らん」

「最後まで聞けよ」

口を入れた虫明へ、弁之助は、しっしつと手を振った。

「険路を抜けたとして、問題は不破関あたりを過ぎてからだ。ちらつと見てきたが、野武士どもが山中を巢にしてやがんだ。まともにつっこみや、身ぐるみ剥がされるか、捕まって役人に突き出されるかしちまう。奴ら、懸賞金ねらってやがるからな。だから、街道に下りなきゃなんねえわけだ」

五右衛門は、なるほどと頷いた。

「弁之助くん、見た目がモロに落武者だもんね。街道は無理でしょ」

「それでもなきや、こんなとこに三月もいねえよ」

「東に逃げようとは思わなかったんですか？」

森田がまた質問をした。

「ムチャ言うなよ。あんたらが逃げたつてことで、東方面は山賊・山伏・農民総出で落武者狩つてんだ。抜けられるかよ。油断してる膝元のほうはまだマシつてもんだ」

またまた五右衛門は納得した。そもそも五右衛門が秀家たちと出会ったのは、落武者狩りをしている最中だったのだ。

「まさか現場に潜んでいるとは、だれもおもいませんからね。それも三月も……」

黒田が、呆れと感心の混じった溜息を吐いた。

「しばらくは辛抱してただけだよ。食うもの食わねえと冬は越せねえからな。食料かつぱらおうと思つて宿へ下りてつたんだ。そして、あんたらがいたつて訳だ。腹が減りすぎて、あんま覚えてねえけどな」

弁之助は腹を押さえた。ぐうと鳴る。

裏町の辻で暴力を振るつていたさいの弁之助思い出して、五右衛門はいつしゅん身震いした。だが、いま目の前にいるのは、気のよさそうに笑う青年である。五右衛門はおそろおそろ声をかける。

「ねえ、弁之助くん」

弁之助がこちらを見た。色の薄い目玉だ。光の加減で琥珀色に光つて見える。

「変装してるつて言つても、おれらも関を通るのは危ないんだよね。弁之助くんみたいに、お殿さまの顔を覚えてる人がいないとも限らないし。山道、案内してくんない？」

「いいぜ。おれも、そろそろここから動きてえとおもつてたところだ。ただし、さつきも言つたが相当な難路だ。道ですらねえ。おまけにこの雪だ。駕籠はここで捨ててかなきやなんねえぜ」

黒田が不安げに貧相な顎ひげの先を弄つた。

「私でも歩いていけるでしょうか」

「無理だつたら、おれが負ぶつてつてやらあ」

また違った不安に、黒田の顔が曇る。いくら洗ったとはいえ、弁之助の体臭は歓迎できるものではない。

そんな黒田の気持ちなど一向に察せぬ森田は、目を輝かせた。

「新免どのがいつしよならば、こんなに心強いことはありません。ぜひ、道すがら武芸の話などお聞かせください」

弁之助は爽やかに笑って応えた。この二人は気が合いそうだ。

「じゃ、夜も遅いし、そろそろ寝よつか」

「今日は疲れたのう」

眠そうに秀家は臉を擦っている。その肩へ黒田が掻巻きをかけた。森田はまだ何ごとが弁之助へ話しかけている。虫明は、弁之助のことを信用しきつてはいないらしく、腕を組んだまま鋭い目を向けている。

五右衛門は、灯台を挟んで向かいに腰を下ろしたおらんへ声をかけた。

「蘭蘭。灯り片付けてくれる？」

「はい」

おらんが立ち上がる。その声を聞いても、弁之助は驚いたりしなかつた。ただちらりとおらんの顔を確認しただけである。

灯が端へ寄せられると、あたりはぼんやりとした闇に満ちた。さつそくだれかの寢息が聞こえてくる。

五右衛門も目を閉じた。隙間風が冷たかったが、すぐに寝入った。

首なし死体とわたし

腰を屈めた弁之助へ、虫明が足払いをかける。均衡を崩したところで尻へもう一蹴り。弁之助はたまらず橋から転落した。盛大な水柱が上がる。虫明は河原へ降り、岸へ手をかけた弁之助の頭を大刀の鑑こしらで突いて上陸を阻止する。

「がっは！ テメエ、なにしやがんだ！」

必死の形相で岸へすがる弁之助へ容赦のない妨害を繰り返しながら、虫明はフンと冷たく鼻を鳴らした。

「きさまの体臭は耐え難い。それにもかかわらず沐浴・行水を拒んだゆえ、実力行使に出たまでだ」

弁之助の案内に従い、ほとんど垂直にそびえた山肌を死ぬようなおもいで伝った。昨夜の吹雪で一尺ほどの積雪があったので、足を滑らせ転げ落ちそうになった回数は両指でも足りない。

苦労の甲斐あって不破関を通ることなく美濃と近江の国境まで来、東山道へ下りた。あとは堂堂かつ目立たぬよう街道を歩いていけばよい。はずだったのだが、ここにきて発汗により弁之助の激臭が復活。目立つわ臭いわいいことナシであるので皆して行水を勧めたのだが

「体を洗うと力が抜ける」

などという訳のわからない理屈を捏ね、弁之助は頑なに拒否した。仕様がなかったので先述の次第と相成ったわけである。

「修行が足りんな」

虫明がくちびるを歪めて笑った。フンドシー丁で焚き火にあたりながら弁之助は鼻の頭へちりめん皺を寄せる。

「くっそ、覚えてやがれ！」

吐き捨てたとたん、盛大なくしゃみが川原に響きわたった。

「ちくしょう。だから行水は嫌えなんだよ」

「普段から身体を清浄に保っておれば、こんなことにはならん」

虫明は顎をちよつと持ち上げ、弁之助を見下した。濡れた弁之助の衣服を棒切れに吊るして焚き火にかざす黒田が溜息をついた。

「虫明どのは、相変わらずムチャをされますね」

「これからの道中、あの激臭に耐え続けるというのか？」

「まあ、確かにすさまじい臭気ではありましたが……」

「でもま。きれいになったんだし、よかつたんじゃないの」

秀家と小石積みに興じていた五右衛門は、適当にとりなした。

おらんが、自分の蓑を脱いで弁之助の裸体へかけてやる。

「寒かつたでしょう？ 弁之助さんだつたからよかつたものの、他の人だつたら死んでるわ」

「こいつをかばうのか」

不機嫌な横目で虫明がおらんを睨んだ。

「そんなんじゃ……」

眉を八の字に下げたおらんの目が潤む。慌てて森田が話題を変えた。

「新免どのは、どこで武芸を身につけられたのですか？」

「親父が剣術指南みたいなことやってたんだよ。道場もったりしてな。だから、ガキのころから仕込まれてんだ」

手鼻をかみながら弁之助は答えた。

「大したことねえ、大道芸みてえなモンだったけどな。あのヤロウ、いま何してやがるかな」

どうやら、父親とはあまり仲がよくないらしい。それでも一しきり、森田と弁之助は武芸の話で盛り上がった。

そこへ虫明が水を差す。

「男は、寝技にさえ熟達しておれば問題ない。武芸など子供の遊びだ」

弁之助は凄まじい顔で虫明を睨んだ。

をきかなかつた。五右衛門がもがくたびに、死体まわりの新雪が舞う。灰神楽のごときその中に、黒い血に染まった地面が露わになった。雪に凍みきって乾いておらず生々しい。酸いような臭いが鼻をつく。

あまりの恐怖に白目をむきかけたところで、とつぜん後ろから肩を叩かれた。

「ぎゃっ！ ご、ごめんなさいいー！」

おもわず謝ってしまった。死体の手を永遠の恋人のごとくぎゅぎゅと握ったまま、五右衛門は恐る恐る振り返る。

干しっぱなしにしたフンドシのように干乾びた老婆が、恐ろしい形相で立っていた。

「ぎええ！」

後しざる五右衛門の手首を、老婆は凄まじい力で掴んだ。

「ほんとにごめんなさい！ すんません、すんません！」

今度は本気で頭を下げた。手首に食い込む指は一向に緩まない。

「助けてください！ほんと、すんません！」

「……広吉」

「へ？」

「広吉！」

老婆は、死体へ縋りついた。

老婆の名前はタツと言った。

死体は、タツの息子・広吉であったのだ。

「なぜ、ご子息だとお分かりになったんですか？」

森田が濡れた肩を囲炉裏であぶりながら訊ねた。雪塗れの遺体をここまで背負ってきたため、彼の背はぐっしりと濡れそぼっている。タツは板間の隅に寝かせた与吉の遺体へにじりより、かけてある筵をめくった。

「これは、わしが作ったものでして」

わずかばかり残った首の付け根に、守り袋が下がっている。

「母と子、このあばら屋で二人暮らし。せめて体だけは丈夫にと……」
皺に埋もれたタツの目尻から涙が溢れた。床に落ちて小さな音をたてる。

「ほんに、広吉を運んでくださって感謝しております」

タツは深深と頭を下げた。しなびたように縮かんだ老女の背を、おらんが擦る。

五右衛門は、タツが出してくれた粥に手をつけられないでいた。ろくろく葬式を出す金もないというのに、老婆は一行それぞれに粥を出してくれた。乏しいとはいえ七人分もの飯だ。タツ一人ならば十日は食いつなげるに違いない。

「だれに殺されたのか、心当たりはないかの」

さすがの秀家も粥に手をつけていない。腕を前に腕を組んだまま尋ねた。

「へえ、じつは……」

ぼつぼつと、タツは話しはじめた。

村は貧しい。季秋を過ぎれば、食うものにも困るありさまだった。刈りいれが終わり、乏しい糧食で迎える冬にだれもが不安を覚えていたころ、屈強な男どもが村に来た。

先にあつた関ヶ原合戦の落武者を狩り出したいが、自分たちだけでは人手が足りない。手を貸せば、公儀から出る恩賞金を幾ばくか分け与える。そういう話を、男たちは村人に滔滔と語った。

もちろん、村の者も戦の直後には落人を狩った。だがしよせん農民の腕であつて、首をあげることできた者は幾人もいない。

野武士のようなうさんくさい男たちではあつたが力だけは強そうで、これならば成果も収められようと、村の男衆はこぞつて出かけていった。ただの落人狩りではない。徒党を組んでの遠征である。

一月が過ぎ、二月が過ぎた。だれも帰ってこない。さすがにおかしいとおもつたが、村に残されたのは女・子どもと老人だけだ。

そんな中、たったひとり残った男が、老いた母を残していくことに不安をおぼえて村にのこった、タツの息子・広吉だった。村の者に泣かれ継られ、しぶしぶながらも広吉は様子を見にでかけた。胸騒ぎをおぼえ、痛む足をひきつつ後を追ったタツが見たのは、無残に殺された息子の姿だったのだ。

タツの小さな目から、とめどなく涙が零れ落ちる。握り締めた拳の甲は、皮膚がまくれ深い皺が走っていた。

「ねえ、五右衛門さん」

涙に滲んだ声で、おらんが訴えた。

「助けてあげられないかしら？」

「うん」

五右衛門は秀家を見た。秀家が口を開く前に、虫明が首を横に振った。

「我我は、先を急ぐ身だ」

「でも、ほっとけないでしょ」

五右衛門は、泣きぬれるタツを横目に食い下がった。虫明は、老婆の涙など歯牙にもかけず吐き捨てる。

「ならば、きさまだけ残れ」

「五右は置いてゆけぬ」

秀家がきっぱりと言って、虫明の目を見据えた。

「五右だけではない。だれひとりとしてじゃ」

「じゃ、決定だな」

弁之助が、身を乗り出してニヤリとした。

「やべえ臭いがプンプンすんぜ」

「臭いがヤバイのは新免どのだとおもうのですが……」

黒田が鼻をつまみつつこぼす。

「必ずや、真実を突き止めてみせます！」

森田が腕まくりをする。不機嫌にそっぽを向く虫明を、おらんがなだめる。

「ほんに、なんと行っていいか……」
タヅは、何度も何度も、頭を下げた。

翌朝。

村に蓄えてあった刀やら槍やらの寝刃ねばを合わせ、おのおの背負えるだけ背負った。蓑の下には胴丸をつける。武器も具足も落人から剥ぎ取ったものであまり役に立ちそうもないが、ないよりはマシだ。こんな重装備で慣れぬ雪山を歩き回るのは危険きわまりない。しかし事件はどうも一筋縄で行きそうになく、乱戦になる覚悟をしていったほうがよいということになったのだ。

山中へ足を踏み入れる。先頭は、案内役のタヅ。続いて五右衛門と弁之助。黒田・秀家を間にはさんで、森田・おらん・虫明と続く傾斜がきつい。一人だけ金物は持たず木刀を差した弁之助が、もたもたしている黒田を引つ張りあげた。

「んなふうにならふらしてつと危ねえよ」
「すみません」

黒田は、半べそをかきながらも弁之助の腕を掴み、えいと足を踏ん張った。彼が何かを背負って歩くことは不可能であるので、蓑を被っただけで武装はしていない。村へ置いて来ること考えたが、万に一つ留守中に役人の調査が入ったら一巻の終わりである。足手まといなうえ無理をさせることになるが、同道させたのだった。

「アンタ、もうちつと体を鍛えたほうがいいぜ」
「おっしゃるとおりです……」

弁之助の言葉に、黒田は申し訳なさそうにうな垂れた。
「新免どのは、なぜ木刀を？」

秀家の腰を支える森田が後ろから声をかけた。弁之助も、先に立たせた黒田の背を押しながら答える。

「刀なんてもろいもんだ。木刀なら少少雑に扱おうが駄目になるよ
うなことはねえ」

「弁之助くん、すごい力だもんね」

五右衛門は、今朝がた弁之助が鉈で木刀を削っていたのをおもい出した。怪力であるが指先は器用で、あつという間に四本もの木刀を削り上げた。二本は腰へ、残りの二本はぶつちがいにして背中へくくりつけてある。怪力の弁之助にとって、刃の欠ける心配のない木刀は、真剣よりもずつと使い勝手がいいのだろう。

やがて道がだんだんとあやしくなり始めた。これまでは、雪が積もってはいても、木立の切れ目やときどき覗く下草の具合などから何となく道筋が読めたのだが、今ではほとんど判別不能である。帰り道に不安をおぼえて、木の枝に印を括りつけながら進んでいくといよいよあたりは鬱蒼としはじめた。雰囲気が無気味でやるせなくはあるが、スギヤヒノキの冬なお青青とした葉が屋根となり、積雪は少なかつた。さきほどにくらべて歩くのがずいぶんと楽だ。シダや熊笹が藁沓の底を刺すのが、くすぐったくて心地いい。

五右衛門はウンと伸びをした。杉の葉にかかった雪が木漏れ日に光り、綺羅のようだ。

そこへ突如、凄まじい叫びが響いた。

「いかにもといったかんじだな」

虫明の言葉に一同うなずいて、悲鳴の元へ急いだ。

足音を殺しつつ歩を進めた先に、不自然に木木の払われた三坪ほどの更地があつた。四間（約7m）ほどの距離から目を細めてみると、賊らしき男が数人群れている。大木に守られることなくたつぷりと雪の降り積もつたそこは、女歌舞伎の舞台のようにポツカリと浮かんで見えた。

五右衛門たちは、おのおの木陰へ身を隠し、様子を窺つた。

「てめえで最後だ」

粗衣に身を包んだ毛むくじやらの男が大刀を振りかぶつた。その側では、踏み固められた新雪が真紅に染まつた上へ、男らしき影が二、三体ちからなく倒れ伏している。

後ろ手に縛られた農民風のうなじへ、大男が大刀を打ち下ろした。悲鳴。血しぶき。首が落ちた。

「ちよつ、何あれ。なんで、あんなことになつてんの!？」

五右衛門は泡を喰つて、隣の弁之助へ囁きかけた。

「分かんねえけど、ためらつてる暇はねえ。行くぜ」

弁之助が躍り出る。森田も続く。

五右衛門は後ろの黒田を振り返つた。

「おれも行つてくる! 黒田ちゃん、お殿さまをよろしくね」

「はい!」

「いやじゃ、わしも」

「だめ!」

黒田の胸へ秀家をドンと突き倒しておいて、虫明・おらんとともに、五右衛門も駆け出した。

立っている敵は四人。

手前に男が二人、刀を握つたまま倒れている。飛び出すや否や、

森田と弁之助が抜き打ちに仕留めたのだ。

森田が血脂にまみれた刀を捨て、背中から新しく大刀を抜いた。

弁之助は木刀を構えなおす。虫明とおらんが、敵の背後へ回る。五

右衛門は、つぶてを放つ構えをとつた。

あとは一瞬である。

ひとりを残し、全員を斬り伏せた。残つた男の顔面へ弁之助が拳骨を叩き入れる。きゆうと言つて倒れた。

「これ、ひどいね」

五右衛門は顔をしかめた。農民風の死体は、どれも後ろ手に縛られ首を落とされている。全部で四人。生きている者はいなかった。

おらんとタツが手を合わせて念仏を唱える。

「なんでつたつて、こんなことすんだよ」

不動尊のごとく怒りに燃えた弁之助が、悔しげに腿を拳で打つた。

五右衛門は気絶した悪人を抱き起こし、木陰を振り返る。

「黒田ちゃん、縛くれる?」

「はい」

差し出された荒縄を受け取る。武装のできない黒田が、ゆいいつ

村から持ち出した物である。

その縄で悪人の上半身を亀甲縛りにしていると、遠くで下生えを踏み分ける音がした。

「十人はいるぜ」

耳ざとい弁之助が声をひそめた。森田と虫明が顔を見合わせる。

「やつらの一味でしょうか」

「おそらくな」

こちらは老人と病人を抱えているうえ山に慣れぬ身である。それに引き替え、敵は多勢の山暮らし。カチ合えば無事ではいらぬまい。

「退くぞ」

虫明の声を合図に、めいめい退却を開始した。縛られた悪人は弁之助が抱え上げる。

いくらかも行かぬうちに、木立の間から敵の姿があらわれた。

「間に合わぬ。隠れるのじゃ」

秀家が灌木の茂みにしゃがみこむ。

更地を出れば、あたりにはほとんど積雪がない。足跡を追跡される心配はほぼないので、音さえ立てなければ何とかなるかもしれない。かかった。

五右衛門は、慌てて切株の陰に伏せた。みなそれぞれに身を隠したが、黒田だけが隠れる場所を決められないでいる。

「黒田さま!」

「馬鹿、出るな!」

助けに出ようとしたりおらんを虫明が引き戻す。黒田はなすすべなく取り残された。

現場の異変に気づいた一味が、わらわらと駆け寄ってくる。

「なんだこりゃ! おい、てめえがやったのか!」

恵比寿みたいなデブ腹をした大男が、慌てふためく黒田の襟首をむんずと捕まえた。腰から山刀を抜いて黒田の喉へ突きつける。その隣で、草履の裏みたいに扁平な顔をした男がかぶりを振る。

「兄貴。どう見たって、こいつみてえな腰抜けが一人でやれるもん

じゃねえぜ」

「そうだな。おい、小便垂れ。てめえ仲間がいやがるな。どこ行つた」

黒田は失禁していた。足元の雪に、たくあんのような見事に黄色い染みができている。そんな状態で答えるもなにもあつたものではない。歯をガチガチやって涕泗を垂れ流すだけだ。

兄貴と呼ばれた大男が、仲間を見回した。

「まだあたりにいるかもしれねえ。探すぞ」

まずい。非常にまずい。きのう関ヶ原宿でチンピラをのしただのとは訳が違う。黒田が相手に捕らえられているうえ、時宜も場所も人数も、圧倒的にこちらが不利だ。五右衛門は、背中へ括りつけた槍の柄を震える手で握った。

「待つてくれよ、兄貴」

意外なことに、草履の裏が待ったをかけた。

「こいつらを殺つたのは、相当な手練れだ。もしかしたら、おれらを待ち伏せしてるかもしれねえぜ」

「そうだとしたって、現場を見られてんだ。帰すわけにいかねえ。おれらのやつてることがバレたら、ただじゃすまねえからな」

「考えてもみてくれよ。こんな山奥で、通りすがりなんてことがあるか？ 村のやつらが気づいて、また様子を探りに来たに決まってるなあ」

「こないだのやつみてえにか」

カツと脳天へ昇つた血を、五右衛門は必死で抑えた。恵比寿腹が言ったのは、タヅの息子・広吉のことに違いない。

草履顔は、拳骨で黒田を小突いた。

「お頭にや、こいつを捕まえたことだけ報告すりゃ問題ねえだろ。おれらがわざわざ危険な目にあふ必要はねえんだ。万が一なんかあつたら、山賊やめてトンスラしちまやあいんだしよ。帰ろつぜ、兄貴」

恵比寿腹はしばらくの間かんがえこんでいたが、どうやら頭を使

うのは得意でないらしい。面倒くさげに肩をすくめて、仲間の死骸を顎でさした。

「こいつらの首も役に立ててやんな」

手下たちが遺骸へ屈みこむ。首をちゃんと切り落とし、ざんばらにほどいた髪を天秤棒へ結わえつけた。ちらばった農民の首も同じように回収し、振り売りの要領で運び去っていく。ぶらさがった首が揺れるたび、どす黒い血がばたばたと地面へ滴り落ちた。

胴だけの死体が十体のこった。

「黒田さま……！」

おらんが、虫明の胸にすがって泣いている。被っていた枯れ枝をはねのけ、弁之助は賊どもの消えた方角を睨んだ。

「泣いてる場合じゃねえ。黒田はまだ死んじやいねえんだ。助けに行くぜ」

縛られ昏倒した捕虜へ活を入れる。

タヅは村へ返した。ここからは、彼女には危険すぎる。

捕虜をどついて案内をさせ、一行は山賊たちのねぐらまで来た。

いかなことにも正面突破は無理なので、いったん杉群の陰へ入り、作戦会議を開くことにした。

五右衛門は、縄を解いて賊の腕を自由にしてやった。

「ねぐらの見取り図、描いてくれる？」

背後から虫明が賊の首へ刀を突きつける。

「余計なことをしようとおもうな」

「わ、わかってますって！」

賊は泣きだした。秀家が、矢立やたてと懐紙を取り出し、賊の手に握らせる。

筆のたてるさらさらという音を聞きながら、五右衛門は溜息を吐いた。

「たしかに、首だけになっちゃえば、落人も農民も見分けがつかないけどさ」

先ほどの草履顔たちの会話と、捕らえた賊から道すがら聞き出した話を反芻する。

「農民の首を落武者の首に仕立てるだなんて。野武士ってのは、えぐい商売だよな」

森田が顔を真つ赤にして拳固を握った。

「無辜の民を騙すなど、非道の極みです！」

「首を持ってこられた役人だって、よく見ればニセモノだって気づきそうなもんなのにね」

「偽装であろうが首は首だ。気づいていようがいまいが、手柄に違いはない。賊にとつても、役人にとつてもな」

「虫明どの！」

「いいか森田。我らが追われる身だということを忘れるな。なにせ、我我はやつらが欲しがっている本物の落人だ。役人にまで手を出せば、こちらが捕まる。今の我らができるのは、賊を成敗するところまでだ」

「しかし」

賊が地図を書き上げた。言い合いは一時おあずけとして、水茎のあと黒黒とした花紙を、皆して覗き込む。

砦は、しごく簡単な造りだった。

西と北は、高さ二丈（約六m）ほどの絶壁である。その二面を背に、南と東には堀と逆茂木さかもぎが引いてある。しかし櫓や虎口こぐちは備えてはおらず、簡素な冠木門が南にひとつあるだけだ。造りからして、敵襲に備えるためのものではなく、中に捕えている百姓たちを逃さないためのものであるらしい。

そのせい、砦内もさほど広くはない。東に便所と納戸。西の絶壁に沿って、一味が寝起きするための板屋が三棟ある。北には米蔵と、農民を捕らえておくための小屋が建っているとのことだ。

「厨くしやがねえじゃねえか。飯はどうしてんだよ」

弁之助が、賊の頭を小突いた。

「南の空き地にかまどが作ってありますので、そこで」

「雨の日はどうしてんだ？」

「干飯や木の実を食べます」

生活程度は低いようだ。

「山賊の暮らしもけっこう大変なんだね」

五右衛門は後ろの秀家へ声をかけたつもりであったが、振り向いてみると姿がなかった。慌ててあたりを見回してみると、秀家は地面へ屈み、泥だらけになって何やら一生懸命にやっている。泥団子を作って懐へ蓄えているらしかった。

「もう、なにやってんの」

「泥で団子を作っておるのじゃ」

「見れば分かるって」

突き出された泥だらけの手を、五右衛門は払いのけた。

二人のやりとりをよそに、賊へ刃を突きつけてた虫明が弁之助から尋問を引き継ぐ。

「一味は何人だ。残っている人質の数も言え」

「先ほど死んだ分も合わせて、四十人です。生きている農民どもは五、六人でしょうか。公儀に差し出すため、適宜に三、四人ずつ処分してましたので……」

タツによると、いなくなつた男衆は二十人ほどだという話だった。ほとんどが殺されてしまったことになる。

「武器は、どこに蓄えてある」

「普段つかうものは、それぞれの寝所の壁にかけてあります。他は、納戸の中に」

「他に訊くことあつか？」

一堂は首を横へ振つた。

「じゃ、仕置きすつか」

弁之助は、賊の顎へ手をかけ首をぐきつとやった。つぶれた暮蛙のような悲鳴をあげ、賊はぐったりとなつた。

「殺してしまつたの？」

おらんが、泣きはらした目を擦つた。

「いや、気絶させただけだぜ」

「すごい！ どうやるんですか？」

森田が目を爛爛とさせて身を乗り出した。腰へ大刀を納めながら虫明が嗜める。

「森田、後にしろ。行くぞ」

「行くつつたつて、どう行くんだよ」

座はしんとなった。弁之助の言葉はもっともだ。間取りを聞き取ったところで、こんな少人数ではいかんともがたい。

秀家が、泥まみれの指で図面を指した。

「この崖には登れぬのかの」

「崖？」

怪訝な顔をした五右衛門へ、秀家は懐から泥団子を取り出してみせた。

なるほど。泥団子はともかく、砦背後の崖上から石や岩を投擲すれば、互角に戦うことができるかもしれない。

皆が気絶した賊を見、そして弁之助を見た。

「な、なんだよ」

「弁之助くんが見境なしにゴキツとかやっちゃうから」

「後先を考えん奴だ」

「だめじゃのう」

五右衛門・虫明・秀家が次次に白い目を向けると、弁之助は真っ赤になつて反駁した。

「おまえらだつて、もう訊くことねえつつたじゃねえか！」

森田までが何か言いたそうな上目遣いをする、弁之助は眉を吊り上げ、唾を飛ばした。

「わかつたよ！ 起こしやあいんだる！」

弁之助は、みずからの帯を解いて裁着袴たつつけばかまを膝まで下ろすと、倒れた賊の襟首を掴んだ。煮しめたように茶ばんだフンドシへ、賊の顔面を押し付ける。

「きやつ」

おらんが目を覆った。虫明が腕を組んで呟く。

「死ぬな」

「死にますね」

「逆効果なんじゃないの」

森田と五右衛門も腕を組んだ。

須臾の間沈黙が流れたあと、強烈なおくびの音が響き渡った。

「おら、どうだ」

弁之助が賊の背中をどんと突く。喉の奥から反吐が一気に溢れ出した。たちまち、あたりは悪臭のちまたと化した。

「うっげえ、おえ」

賊が泣いている。吐いている。

五右衛門は鼻をつまみながら、地図を指し示した。

「苦しいとこ悪いんだけどさ。この崖の上、どうにかして行けないかな」

涙と嘔吐物にまみれた顔を賊は上げた。一、二度しゃくりあげたあと、首を横に振る。

「無理ですよ。登れないから、砦の背にしてるんですから」

「役に立たねえヤロウだな」

弁之助が指をゴキゴキやった。

「ひええ！」

「弁之助くん、脅しちゃダメでしょ」

五右衛門は、賊をやさしく諭した。

「登れなくてもいいからさ。ちょっとでもなだらかになるとこまで案内してくんない？」

「はあ。まあ、それなら」

ふらふらする賊を先頭に、砦の背後を奇襲すべく一行は出発した。

「ここなら登れそうですね」

手で目庇をつくって、森田が崖を仰ぐ。

屏風のように折れては曲がりして続いていた絶壁は、砦から西南

へ半里（約二？）あまりの地で、やや角度が甘くなっていた。他に比べて幾分ゆるやかではあるが、人が登れる状態にはない。賊があきれた顔で森田を見た。

「いや、どう考えたってムリ……ぎゃっ」

「今度こそ、ゆっくり眠りやがれ」

弁之助は手をぱんぱんと払った。再び首を捻られ昏倒した賊は、藁束のように雪の上へ倒れた。凍えないよう、おらんが枯れ草をかけてやる。

払った手に今度は唾を噴きつけ、弁之助は岩壁へ手をかけた。僅かな突起を手がかりにするすると登っていく。一同はほう、と感嘆のため息をもらした。雪の山中で三月も暮らしていただけのことである。

登りきると、弁之助は肩へかけていた麻縄を投げ下ろした。下の面は、それを頼りに一人ずつ絶壁を登る。目方のあるおらんはさすがに苦しそだったので、縄にしつかと捕まらせ、みんなで引き上げた。

岩壁の上は殺風景だった。目に入るものといえば、積もった雪の間からちよろちよろと頭を覗かせている枯れ草だけである。足で雪をかいてみると、下は硬い岩盤だった。これでは樹木は育たない。

視線をめぐらせる。開けた視界の端に、小さく砦が見えた。

五右衛門はぐるりと腕を回した。

「じゃ、行こっか。みんな、拾えるだけ石拾ってってね」

「うむ」

「お殿さまはもうムリでしょ」

秀家の懐は泥団子でぱんぱんだ。まるで妊婦である。

石を集めつつ崖上をしばらく行くと、砦の上へ出た。西の崖である。地図のとおり、崖下には板囲いの苦屋くまが三つ並んでいる。北西の角、絶壁に挟まれた最奥地にあるのが首領の住まいだ。一行はその真上へ移動した。

「あれ、黒田さまじゃないかしら」

おらんが指差した先は砦の南で、かまどを設えた広場になっている。その中央で、黒田がフンドシー丁にされ小突き回されていた。

「寒そうじゃのう」

秀家が身震いをした。森田と虫明がうんうんとうなずく。

「黒田どの、死んでしまうのではないでしょうか」

「殉職だ。御内儀には、立派な最後であったと伝えてやろう」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ。助けなきゃ」

そうは言ったものの、五右衛門にはどうすることもできない。あいにく近くに岩や倒木はなく、崖下へ落とせるものといえば道道に拾った小石だけだ。苔屋の屋根に小石を投げたくらいでは、中にいる者に騒音で不快なおもいをさせるくらいが関の山である。かといって、黒田が裸に剥かれている広間までは距離があり、小石を投擲しても届きそうにない。小屋の屋根へ飛び下り、それから行動を起こすしかなさそうだ。

虫明が、五右衛門を振り返った。

「拙者と森田・新免が先に行く。きさまは安全を確認してから、おらんと二人で殿をお連れしろ」

「お殿さま、置いてかなくていいの？」

「できることならそうしたいが、お聞き入れくださるまい」

「うむ。わしも行くのじゃ」

秀家は胸を張った。うなずいた五右衛門に背を向け、先制組の三人は崖の縁に並んだ。

「降りたら、投石がましながら屋根伝いに走りやいいんだろ。とりあえず、百姓のいる牢屋を目指そうぜ」

弁之助が木刀を握る腕を回した。森田も槍をしごく。

「彼らを解放して手を借りるわけですね」

「行くぞ。そろそろ本当に黒田が死にかねん」

雪に覆われた板屋根に虫明が目を据えた。

気合い一発。三人は同時に地を蹴った。

板屋の屋根までは一丈（約3m）強。着地成功、とおもった瞬間。

小屋は横倒しに崩壊した。

「きゃっ！」

おらんが目を覆った。

瓦礫の山から、もうもうと土埃があがる。秀家と五右衛門はあ然とした。

「ゆるい造りじゃのう……」

「おれ、ここに残っててよかった……」

土埃が納まった後には、尻もちをついた弁之助・森田・虫明と、昏倒した裸の男女が一組、木っ端や木片の間に見え隠れしていた。

黒田を虐待していた賊どもが、わらわらと集まってくる。虫明がとっさに大刀を抜き、倒れた裸男の喉へ切っ先を突きつけた。

「ああ！ 頭！」

「なんだ、てめえらは！」

賊どもが色めき立つ。

泥と埃にまみれた先制隊の三人は、それぞれに低い声を出した。

「我らが何者でもいい。広間で尋問を受けている男を、こちらへ渡せ」

「この素っ裸と交換だ。さっさと連れて来いよ。さもなきや」

「殺す」

森田も、裸男へ槍穂を突きつける。賊の一人が広場へ走って、首まで雪に埋められていた黒田を引っこ抜いて連れてきた。弁之助が、フンドシー丁の黒田を受け取る。木っ端に埋もれた棟梁の体を、森田が抱え起こした。

崖上から様子を見守っていた五右衛門の視界の隅で、何か鋭く光った。米蔵の陰。弓。

虫明が倒れた。左の脇に、深深と矢が刺さっている。賊が一気に四人を押し包んだ。乱戦になる。蹴立てられた土埃があたりを覆った。

「九平次さん！」

虫明の名を叫び、おらんが地上へ身を躍らせる。柿のへしゃげる

ような音がした。着地と同時に、賊が二、三人ほど踏み殺されたらしい。

「ちよつと！ 蘭蘭！」

崖から身を乗り出した五右衛門の横を秀家がすり抜ける。

「大変じゃ！ わしも！」

「待って！」

なびいた蓑の裾を引つ掴まれ、秀家がつんのめった。

「ぎゃつ、放すのじゃ！」

「行くなら、そつちじゃなくてこつち！」

秀家の手を引いて、北の崖まで移動した。上から石と泥団子を投擲し、虫明を討った射手を仕留める。

「お殿さま、いい？」

五右衛門は、崖下の米蔵とその横の人質小屋を交互に指した。

「ここからじゃ距離があつて屋根には届かないから、地面まで飛ぶよ。着地したら、すぐに牢まで走って」

「うむ」

秀家が崖下へ目を落とした。地面まではおよそ二丈（約六m）。しかしそこは吹き溜まりになるらしく、二尺（約六十センチ）ほども雪が積もっている。多少危険ではあるが、飛び降りてもなんとか無事でいられるだろう。

「捕まつてる人を解放して。そうしたら皆を助けられるから」

「任せておくのじゃ。ゆくぞ、五右！」

飛んだ。足に衝撃が走る。痺れはしたが、大丈夫だ。走れる。

わき目も振らず、人質小屋へ向かった。

すごい悪臭だ。狭い小屋の中に糞尿垂れ流して監禁してあったに違いない。実際、戸の下に小さな差し入れ口があるだけで、入り口は釘で封鎖してある。

「これ、人の出入りがあるたびに、釘ぬいたり打ったりしてたのかな」

五右衛門は、打ちつけられた戸を力任せに引っぺがしにかかった。

秀家も横から手を貸す。

「頭領の住まいですらアレじゃからの。門をかけようなどと言い出す輩はおらぬのじゃろう」

「中の人たち、無事かな」

日も当たらず、不潔な室内だ。病で死んでいる者がいてもおかしくはない。

戸が、音を立ててはずれた。

「うっわ！ くっさ！」

覚悟をしていたとはいえ、五右衛門はおもわず鼻を押さえた。中では、五人の若者が横になったり座ったりしている。だれもかれもが汚れ放題。人相の判別もままならなかった。

数珠繋ぎに縛られた農民たちの縄を切ってやりつつ、五右衛門は手短に事情を説明した。

「みんな、動ける？ おれら、助けに来ただけど、数で賊に負けててさ。できたら、手、貸し……」

「任せとけ！」

「やつら、騙しやがって！ ぶっ殺してやる！」

話し終わる前に、全員が小屋から駆け出して行った。さすがは野良仕事を生業とする男たちである。二ヶ月程度の監禁ではびくともしない。

五右衛門と秀家も、急いで虫明たちのもとへ向かった。相変わらず混戦模様である。弁之助が木刀で敵を殴り倒す。森田の槍がうなる。加勢立てした農民たちが、拳固を振るい、奪った武器をぶん回し、賊をなぎ倒した。おらんは、虫明と黒田を抱え安全なところまで退避したようだった。五右衛門と秀家は、泥団子による目潰しと投石で援護をする。

苦戦を強いられたが、弁之助・森田の獅子奮迅の活躍と百姓たちの気迫により、賊は次々と打ち倒された。残りが十人をきったところで、度を失った賊どもは散り散りになって逃げていった。怒りの収まりきらない農民たちが雄叫びをあげ追撃する。

皆には、打ち捨てられた賊の死体と五右衛門たち一行が残るのみとなった。

「九平次さん！」

倒壊を免れた小屋の陰でおらんが泣いている。その胸に抱えられた虫明は、ぴくりとも動かない。

「虫明どの！」

森田が槍を放り出して駆け寄った。虫明の肩を揺すぶるが、やはり反応はない。五右衛門も駆けつけた。泣きじゃくるおらんの背をさすってやる。

弁之助が近寄って脈をとった。

「落ち着けよ。死んじやいねえ」

具足を脱がせ、傷を確認する。裂いた布を巻いて刺さった矢を固定し、体を温めるよう森田へ指示した。

「ここじゃなんともできねえ。ばあさんのところに帰って、それからだ」

「わたしがお連れします！」

森田が虫明を背負いあげた。血が滴る。見ると、森田の二の腕から流れているのだった。

「おまえも怪我してんじやねえか。おれが」

「いえ、わたしが！」

森田の目から、ぼろりと涙が零れた。

「……森田くん」

五右衛門は、胸が締めつけられるおもいがした。隣では、目を覚ました黒田へ秀家が着物をかけてやっている。

「わたしのせいで、虫明どのが……」

「言うでない黒田。だれのせいでもないのじゃ。だいいち、虫明が死ぬなどということは、ありえぬ。ありえぬのじゃ」

おらんの肩を抱いて、五右衛門は立ち上がった。

母上さまとわたし

横になった虫明の顔は青かった。血の気が失せている。それでも、昨日よりはずっとマシだった。意識もある。

身を起こそうと寝床へ肘をついた体を、おらんが慌てて押し止めた。

「だめよ、九平次さん」

虫明はその手を振り払った。衣紋がはだけて、脇の傷口を締めたらシガのぞく。見かねたタツが、皺のよった指で虫明の襟を直してやった。

相手がタツでは振り払うこともできず、促されるまま虫明は再び横になった。はだえの青い首元へ、おらんが布団をかけなおす。

払曉まえのぼんやりとした光が、板壁の隙間から射していた。旅ごしらえを終えた五右衛門は、部屋の隅でただじっと端座している。壁から漏れる日と囲炉裏の火とを半半に浴びた虫明の顔は、平生よりもぐつと線が細く見えた。額と口元に浅く走った皺には精気がなく、どこか作り物めいている。

枕元であぐらをかいた秀家が眉宇を寄せた。

「寝ておれ。傷を癒すのが先決じゃ」

「しかし……」

再び半身を起こしかけた虫明であったが、くつと呻って脇を押えた。秀家の脇に控えた森田が、慌ててその身を支える。

「無理はいけません！」

「はなせ森田。起きたところで死にはせん」

「アンタも強情だな。どう見たって起きられねえじゃねえか」

寝床の足元へ腰を下ろした弁之助が腕を組んだ。森田がこうべを縦に振る。

「このまま旅をつづけるのは無理です！」

「無理かどうかは拙者が決めることだ」

囲炉裏へ櫓ほたを足していた黒田が、言い争いに耐えかね涙ぐんだ。

「申しわけありません、わたしのせいで……」

「きさまのせいではないと、なんと言ったらわかる！」

虫明は怒鳴って、布団を跳ね除けた。いなづまのような青筋が額へ浮き出で、色をなくしたくちびるを噛み締める頬が怒りで細かく震っていた。痛みのせいか、青白い肌はいちめん脂汗で覆われている。汚染めの小袖の脇に黒く血が染み出した。

おらんが声を詰まらせた。

「九平次さん、お願いだから……」

分厚く肉の巻いたおらんの頬へ涙が筋をつけた。顎先から床へ落ちて、ぱたぱたと音を立てる。

秀家が虫明の肩をそつと押した。

「争うてもはじまらぬ。とりあえず、横になるのじゃ」

「しかし、殿の御前で」

「かまわぬ」

秀家がいつになくきつぱりと言ったので、虫明はゆっくりと背を寝床へ戻した。乱れた掛布を、秀家が自らかけなおしてやる。

囲炉裏が燃えている。板壁から差し込む光の色がはつきりしてきた。日の出はじきだ。気を使ったのか、いつのまにかタツは席を外していた。

外は深として、なんの音もしない。昨夜は、事件の後始末で村中が大騒動だった。今朝はだれもがぐつすりと眠っているに違いない。「ここへ、生涯とどまれとは言っておらんぬ」

静かに切り出した秀家の肌が、火と日でまだらに染まっている。「回復し、気候が温うなつたところに、ゆるゆると円融寺へ来ればいいのじゃ。急げばたった一日の距離じゃ。離れるうちに入らぬ」

そう言っていつものいたずらつばい顔にもどり、おらんへ目くばせをする。

「祝言も、それからでも遅うはないしのう」

おらんは、真っ赤になつてうつむいた。縮れた髪が頬へかかる。はんぶん伏せられた目は、涙の名残で零れ落ちそうに潤んでいた。太い指が恥ずかしげに着物の膝を握っているのがいじらしい。

「殿のお命は、必ずやわたしがお守りします！」

森田が発した馬鹿でかい声に、弁之助もニヤリとする。

「ま、おれがいるんだ。間違いはねえよ」

横になった虫明の肩をどんと突く。傷に響いたらしく顔を歪める虫明を、黒田が介抱する。

「虫明どのがいらつしやるのを、心よりお待ちしております」

柔和な黒田の顔を、虫明の目が捉えた。その視線が、森田・弁之助を辿り、五右衛門の上で止まった。

五右衛門は力強くうなずく。

「おれもいるんだしさ。虫明さん、早くよくなってよ」

「きさまらなどに任せておけるか」

まだ苦しそうな顔のまま、虫明は目を逸らせた。狭い板屋だ。どこを見ても、だれかがいる。顔を戻して、虫明は五右衛門をまっすぐに見た。

「……頼んだぞ」

「うん」

にわかに強く朝日が射し込んだ。日が昇つたらしい。沈んでいた室内が一気に明るくなった。

そろそろ出発しなければならぬ。めいめいに荷物を担ぎ始めた一行のそばで、虫明はゆっくりと身を起こした。膝を揃えて、痛みを震える手を床の上へつく。

「殿」

額を下げた。

「どうか、ご無事で」

「うむ」

うなずいたきり、秀家はなにも言わなかった。虫明も顔を上げない。一行はそのまま戸口へ向かった。おらんは外までついてくる。

小屋の脇で待つていたタツといっしょに見送ってくれた。

朝日が、旅立つ五人の影を長く伸ばした。冷たい風が頬を掠めていく。板屋の中から、すすり泣きが聞こえた。

だれもが聞かないふりをした。

早朝の街道に人影はない。

「さみしくなつてしまいましたね……」

黒田がぼつりと言った。朝日に細めた睫毛が金色に光っている。

古びた筆のように貧弱な髭も、同じようにまぶしく日を照り返していた。

五右衛門もしんみりした。

「うん……」

「でも、終生の別れというわけではありませんから！」

森田が腕を大きく回した。弁之助も同じようにしてから舌を出す。

「案外、あのまま居ついちまつたりしてな」

「おタツさん、嬉しそうだったもんねえ」

なにかれと虫明の世話をやいていた老婆を、五右衛門はおもい出した。なんでも、死んだ息子は虫明と同じくらいの年だったそうだ。着物の背丈がぴったりだったから、背格好も似ているのだろう。

「おらんだの娘ぶりにも大喜びされましたね」

雪道に藁沓をとられてよろけながらも、黒田はにつこりした。虫明が抜けて気が張っているのか、顔色がいい。そんな黒田に、秀家は満足そうにくちびるの端をあげた。

「虫明にとつては、あそこでのんびりと暮らしたほうがよいのかもしれぬのう」

「やめてよ。あんな後家さんだらけの村にいたら、虫明さん何するかわかんないじゃないの」

「村中の娘に手を出して刺殺されるに決まっています」

「それは森田くんですよ」

池田宿での二股事件を蒸し返されてしよげ返った森田を、皆で小

突き回す。

急勾配の続いた街道が、なだらかになってきた。いよいよ本格的に近江へ突入することになる。これからが正念場だ。執拗なからかいを振り切るように、森田が大きな声を出した。

「虫明どのとの再会を果たすためにも、必ずや無事に京へ辿り着きましょう！」

一行は、だれからともなく拳を突き出し、今後の無事を祈った。そんないい雰囲気の中、調子つばずれな声が、無人の街道へ響き渡る。

「旦那さまー」

背後を振り返ってみるが、朝日がまぶしくてなにがなんだかまったく見えない。しかし、こんな間抜けな声の持ち主は一人しかない。

雪煙を蹴立て猛然と突進してくるのは、矢野家に置いてきたはずの下僕・九蔵だった。

「おまえ、なにしてんの」

五右衛門は面食らった。

「おいら、奥様におつかい頼まれて。それで、えーつとね」

雪まみれの九蔵は息があがっているうえ、もともと頭の加減がよくないので、言詞が明瞭でない。

黒田が水筒を差し出した。

「わたしたちがまだ近江だと、よくおわかりになりましたね」

旅程は、当初の予定よりだいぶ遅れている。九蔵が追い越してしまっても不思議ではなかった。

「旦那さまのおいがするから、だいじょうぶだとおもって」

「においを辿ってきたのかよ……すげえヤロウだな」

自らの超人ぶりを柵に上げ啞然とする弁之助を、九蔵はまじまじと見た。

「だれ？」

「中途より同道しておる、新免弁之助じゃ」

秀家の紹介を受けて、九蔵はにこにここと首を傾げた。

「おいら、九蔵っていつの。旦那さまの下僕だよ」

「ああ、よろしく頼むぜ」

弁之助は、白い歯を見せつつも、九蔵の全身を油断なく観察している。武芸者として、九蔵の頑健さに興味があるのだろう。

五右衛門はここにいたってようやく気を取り直した。

「ところで、おまえ何しに来たの？ おつかいって？」

「あ、うーんとね」

恐ろしいことに、真冬にも関わらず九蔵がまとっているのは裕あひせ一枚きり。足元にいたっては裸足である。垢じみてヨレヨレになった衣紋を開いて、九蔵は紙切れを取り出した。五右衛門は受け取って読み上げる。

「えーと。十二月二十六日、男児誕生。なにこれ？」

「おととい、男の子が産まれたの」

「読めばわかるって。産まれたからなんなの？ つかだれが産んだの」

「奥さまだよ」

黒田・森田は凝然とし、秀家は目をぱちくりと瞬いた。弁之助は事情がわからぬようすできりに首を捻っている。そうした面顔を順繰りに見渡して、五右衛門は顎が外れそうになった。

「うえええええ！？」

おかねが懐妊しているとは露ほども知らなかった。だいたい、いつできたのだ。十月まえの自らを顧みるが、そんな記憶はいつこうにない。だからといって、おかねに手を出すような阿房竹好きの野楽木好きがいるとはおもわれないから、やはり下手人は五右衛門自身でしかありえない。酔った勢いでこましたのだろうか。

「めでたいのう」

狼狽する五右衛門をよそに、秀家がぼんぼんと手を叩いた。九蔵も破顔する。

「だからね、帰ってくるまでに名前かんがえといてねって奥さまが

言つてたよ」

黒田・森田・弁之助も祝福する。

「おめでとうございます」

「虫明どのにも知らせなければ！」

「よく分かんねえけど、めでてえな」

幸運なのか事故なのかよくわからないが、嬉しくないこともない。照れ隠しに笠の中を大刀の小柄でぼりぼりやっていた五右衛門であったが、ふと九蔵のことが気になった。

「九蔵。おまえ、どうすんの。このままついてくんの？」

「奥さまには、すぐに帰って来いって言われてるんだけど」

「今とつて返せば、道中で正月にかかつてしまうのう。新年早早、知らぬ土地でひとりきりでは不憫じゃ。ついてくるがよい」

秀家のとりなしがあれば、少々あそんで帰ったとて、おかねも文句は言つまい。

「仕切りなおして、行くとするかのう」

秀家がぐんと伸びをした姿が、妙にかわいかった。

「じきに円融寺です」

森田が振り返った。若い頬が、西日に黄色く染まってみかんみたいだ。

五右衛門は、深く被っていた笠を持ち上げ、額の汗を拭う。道脇の雪が光っている。空気は冷たい。

「賑やかでよいのう」

秀家が、あたりを見回した。

潰れかかったような板屋の並ぶ貧しい村である。山稼ぎをしている者が多いらしく、そこかしこに毛皮だの材木だの薪だのが、積んだりぶら下げたり立て掛けたりしてある。しかし今それらに構っている者はいなかった。

本日は大つごもりなのだ。行き交う人は皆、じきやってくる正月

にてんでこまいである。

「なんとか年内に辿り着くことができましたね」

黒田が白い息を吐いた。弁之助が、厚いくちびるから大振りな犬歯を意地悪く覗かせる。

「安心するのは早えぜ。これから、強盗・追い剥ぎ・物取りなんかが出てくるかもしんねえんだからな」

「お、脅すのはやめてください！」

先日、賊にかどわかされた黒田は青い頬を冷や汗でびっしりと埋めた。五右衛門は弁之助を睨む。

「こら弁之助くん。からかつちゃダメじゃないの」

虫明と別れ九蔵と合流した昨日は、大津で体を休めた。京まで足を伸ばすこともできたのだが、敵の膝元で宿をとる度胸はさすがにない。

明けて本日の早朝。大津を出た。洛中を抜けて桂川沿いを北上し、一日かけて円融寺のある山村へと辿り着いたというわけだ。

「あの坂を上りきれば山門ですから。心配いりませんよ」

森田も黒田を取りなした。その指が指したなだらかな坂の上に、古ぼけた山門の屋根がちらりと見えている。

九蔵が嬉しそうに五右衛門の蓑をひっぱった。

「すごいね旦那さま。おいら、こんな村みたことないよ」

「うちだつて村じゃん」

「えー、ちがうよー。うちのまわりには、あんな人いないもん」

九蔵の太い指が、往来の一角を指した。

うるんな商人が二人、筵の上へ怪しげな薬を広げている。怪しいどころか、どう見ても雑草だ。筵のそばへ座った商人たちは、痩せこけ憔悴してはいるが、どこか油断ならない目つきをしていた。明らかに、もがりあがりの山師だ。

「こら九蔵、目つけられたらどうすんの！ 指さしちゃダメ……て、あれ？」

五右衛門は目を皿のようにして、もがり商人の顔をガン見した。

弁之助が呆れて首を横へ振った。

「アンタもじゆうぶん見てんじゃねえか」

「ちよつと待つてください。あれは……」

「ひええ！」

森田がみなまで言わないうちに、黒田は派手に尻餅をついた。震える指が二人の商人を指す。

はたしてそれは、先日黒田をかどわかした山賊、草履顔と、恵比寿腹の兄貴であった。

「なんでこんなところに」

森田の目が一瞬のうちに怒りで燃えあがった。握られた拳が細かく震っている。今にも抜刀しそうな勢いだ。

「遠すぎる。まだ抜くんじゃねえ」

弁之助が短く嗜める。細められた弁之助の瞼も、たぎる血に痙攣していた。剣呑な光りを目玉に湛えたまま、足元の小石を拾いあげる。

「ほつとくわけにやいかねえな」

大きく振りかぶった。次の瞬間、すさまじい勢いで空をきった小石は、狙い違わず恵比寿の横鬢よこびんへぶち当たる。土嚢を放ったような鈍い音をたてて、恵比寿は横様にぶつ倒れた。

ぽかんと冬風に吹かれるままになっていた草履顔であったが、こちらの姿を認めると、あつと口に手を当てた。恵比寿の巨体を引きずり、子細かまわず逃げはじめ。

「逃がすかよ！」

弁之助が韋駄天に走る。筵の上へ広げられた薬類を踏みにじり、草履顔の襟首を拿捕した。続く森田が、その鳩尾へ膝蹴りを入れる。黄色い反吐をぶちまけ、草履はのたうちまわった。追いついた五右衛門・秀家・九蔵も加わり、二人の賊を囲む。

ふと気がついて、五右衛門は来た道を振り返った。五間（約九m）ほど後ろで、恐怖を喚起し狂癪きやうしやくをおこした黒田が、不明瞭な文言をわめき手足をばたばたやっている。哀れではあるが、今はそれどこ

るではないので放っておくことにする。

「我らをつけてきたのではあるまいの」

秀家が額に痾筋を浮かべた。目も血走って尋常の顔つきではない。普段へらへらしているだけに恐ろしいものがある。

「めめめ、滅相もない！」

尻餅をついた草履は、蹴飛ばされた腹を押さえつつ首を横へ打ち振った。顎に嘔吐物がべっとりへばって汚らしい。

「お……おれら、あそこから逃げ出すだけが精いっぱいです。着の身着のまま、こうして糊口をしのいでいるわけで」

草履顔が、筵の上に並べられた薬草もどきを示してみせる。

「下手な言い訳してんじゃねえぞ」

弁之助の木刀が、草履男の鬢びんを打った。堪らず倒れた横面へ、森田が蹴りを入れる。腰のものが抜かれた。

「きさまらのせいで、虫明どのが……！」

振りかぶった腕を、五右衛門は慌てて掴んだ。

「たんまたんま！　こんなところで刃傷騒ぎおこしちゃマズイでしょ
！」

「許さぬ！」

「あつ、お殿さままで！」

「虫明のかたきじゃ！」

「まだ死んでないでしょ！」

押えようとしたが、若い三人は興奮しきっていかんともしがたい。五右衛門は頭を抱えた。

「もう、みんな、場所かんがえてよ！」

道のと真ん中である。わらわらと集まりだした野次馬を背にぬうぼうとしている九蔵を、五右衛門は叱りつけた。

「九蔵、おまえなにやってんの！　止めて止めて！」

「でも、みんな怒ってるよー」

「なんでもいいから止めてっばー！」

森田と秀家は仇討ちに目が血走っているわ、弁之助は髪を逆立て

逆上しきっているわ、かなたに取り残された黒田はまたもや小便を漏らしたのか足元に水溜りをつくって通行人から憐憫の目を向けられているわ、もはや地獄の様相である。

森田が、草履の襟首をふん掴まえて背負い投げにした。投げ飛ばした草履の体は、一行を取り巻く観衆へ激突する。悲鳴があがる。

にわか騒ぎとなった野次馬たちの真ん中で、運悪く巻き込まれた野良着姿の娘が、どうと倒れ伏した。その手から、土にまみれてゴマ団子のようになった餅が三つ四つ転がりだす。

観衆はさらに騒然となった。

「かたぎのもん到手えあげるた、なんたるこつちゃ」

「しかも若い娘に」

「酷いやつらじゃ」

土まみれで泣き濡れる娘の周囲で、百姓たちがてんでに囁きかわす。

五右衛門はむっとした。悪いことをしたとはおもうが、かたぎであるのは五右衛門たちもそうである。喧嘩を面白おかしく見物していたくせに、巻き込まれたとたん云云言い出すのは卑怯千万であるし、だいいち非があるのは草履と恵比寿だ。こちらが罵声を浴びせられる筋はない。

「ちよつとちよつと、言わせておけばさ。おれらにだって事情つてもんが……て、痛ッ！」

どこからともなく飛来した泥の塊を契機に、さまざまなもの五右衛門たち一行に向けられて投げつけられ始めた。

倒れた娘を抱き起こしたオカミサン風が、泥団子のようになった餅を五右衛門の顔面へ叩きつける。青眉の新妻風は、軒に干してあった大根を木刀のように振り回しながら九蔵へ襲いかかった。

男衆も負けていない。丸太に薪ざつぽ、どこから出してきたのか鍋の蓋や赤ん坊のおしめまで構えて、五右衛門たちを押し包んだ。

「きゃー、ちよ、待ってってば！ あつ、森田くん大根投げ返しちやダメ！ 弁之助くん、頭突きはご法度！ お殿さま、噛み付いち

や危ないじゃないの！」

喉も裂けよと叫んだ声は、喧騒にかき消されて届かない。近くで襲撃をのらくらとかわしている九蔵へ五右衛門は怒鳴った。

「九蔵、逃げるよ！ みんなまとめて担いでつて！」

「でも、みんなすぐく一生懸命だし」

「いいから言うとおりにしてよ！」

暴れる森田・秀家・弁之助を回収した九蔵は、三人を片方の肩へまとめて担ぎ、残った片腕で百姓たちを跳ね飛ばし、騒擾を突破した。続く五右衛門は、百姓どもに殴られ引つかかれ滅多打ちにされながらも来た道を戻り、瘋癲の発作をおこした黒田を助け起こす。

「しつかりして、黒田ちゃん」

「うえはおえへあえひ」

「もう！」

しよがないので横抱きにして、五右衛門は全速力で駆けだした。こうなつたら、円融寺へ逃げ込むしかない。

なだらかに見えた山門への坂は、おもったよりきつい。五右衛門の息が荒くなる。ふと耳元に、同じように荒げられた息がかかった。ぎくりとして目をやると、恵比寿を担いだ草履の必死な顔があった。

「ちよつと！ なんてついてきてんの！」

「そう言われやしても……うわ、あいつてっ！」

とつぜんのめった草履の後頭部を見ると、包丁がざっくりとめりこんでいた。五右衛門が慌てて振り返ると、三間（約五・五m）ほど後ろから、般若の形相をした老婆が、指の股に挟んだ包丁を棒手裏剣のように打ち投げてくるところであった。

「ひええ！！」

五右衛門は死に物狂いで走った。

草履も前のめりになりながら駆けつづける。刺さったままの包丁がぐわぐわと揺れる。

「げげ！ だ、大丈夫なの！？」

「へ？ いや、痛くはありやすが」

首を傾げると、包丁がめりめり食い込む。見ているこつちが痛い。「とりあえず一時休戦ね。ついてきて！」

坂の上に見える山門を五右衛門は顎で指した。草履がうなずく。包丁がめりつとなる。

追いつがる百姓たちに蓑・着物・髪などを筆られつつも、一行は円融寺の山門へ辿り着いた。

門を掃き清めていた尼僧が目を上げる。

「あつ」

九蔵に担がれた秀家が頓狂な声をあげた。なんだと尋ねる間もなく、百姓衆が追いついてくる。竹箒を手にした尼を目にして、農民たちは慌てて額を地に擦り付けた。

「こ、これは円融院えんゆういんさま」

「いったい何の騒ぎです」

円融院と呼ばれた美しい尼僧は、凜凜しい声で尋ねた。先ほどの大根新妻が、叩頭したまま申し述べる。

「へ、へえ。そこなるもがりどもが、村の娘へ乱暴をしましたのです」

「本当なのですか」

尼僧が五右衛門を見た。横抱きにした黒田を抱えなおし、慌てて五右衛門は首を横へ振る。

「ちが……いや、突き飛ばしちゃったのは事実なただけどさ。それは偶然の事故っていうか」

「嘘つくな！」

薪ざつぽを持った男ががなった。

「やんのかテメエ！」

九蔵の肩から地面へ降りたつた弁之助が木刀を振り上げる。秀家と森田も大刀を構えた。

「おやめなさい」

手にした箒を、円融院は脇へ置いた。

「これだけの騒ぎになったのです。どちらか一方のみに非があった

ということはないでしょう」

「で、ですが」

オカミサン風の女が、さきほど突き飛ばされた娘の肩を支えながら食い下がった。娘の頬は、涙で無残に濡れている。

「この子の正月はどうなるんです。病気の母親を抱えて働きづめ。ようよう手にした餅が、こいつらに」

「では、ごうしましょう」

円融院は、法衣の袂から巾着を取り出し、娘の手に握らせた。

「これで、新しいものを賄いなさい。喧嘩騒ぎを起こしたこの者たちは、当寺にて預かりましょう。取り調べてみて、もがり・たかりの類であれば、お上に差出します」

「円融院さまがそう仰るのなら……」

百姓一同が頭を下げる。円融院は、五右衛門たちのほうへ向き直った。

「あなたたちも、それでよろしいですね」

五右衛門たちもうなずいた。円融院が赤いくちびるに笑みを浮かべ、百姓たちを促した。

「さあ、早く家へ戻りなさい。あなたたちは中へ」

先導され、五右衛門たち一行は山門をくぐった。雪のかかった境内を抜け、本堂と庫裏の前を過ぎる。敷地のはずれに小さな離れがあった。円融院の住まいであるらしい。

五右衛門たちが上がると、彼女は障子を締め切った。振り向いた顔は慈悲に満ち満ちている。

「八郎どの。よくぞ無事に帰られました」

「お久しゅうございます。母上さま」

秀家が頭を下げるのを見て、五右衛門はびつくらこいた。彼女が秀家の母・お福であるならば、とうに五十を超えているはずである。しかし、目の前の尼僧はどう見たって三十そこそこであった。

隣で額を畳に擦りつけている森田を、五右衛門はつついた。

「ね、あの人ほんとお殿さまのお母さんなの？」

「あのお方と言つてください。妙な気をおこさないでくださいよ」
「そんなわけではないですよ。虫明さんじゃないんだから」

それにしても驚異の若さである。まじまじ見つめていると、円融院は五右衛門へ視線を移し、莞爾かんじと微笑んだ。一重のまぶたが美しい弧を描き、くちびるの赤が白皙にしたたるようである。

「あなたが、五右衛門さんですか」

「えっ、あ。うん、そうだけど」

五右衛門はどぎまぎした。

「お話は、森田と虫明から伺っております。八郎をお助けくださつて、ありがとうございます」

円融院が手をついたので、五右衛門も慌てて頭を下げた。これほどたおやかな女性の腹から生まれ出ながら、あれだけ傍若無人に育った八郎こと秀家は、逆奇跡である。

筆で刷いたような眉の根を、円融院はきゅつと寄せた。

「虫明はどうしたのです。まさか……」

「あ。そういえばあのおじさん、いないね。ね、旦那さま。どーしたの？」

脇腹をつつく九蔵の手を、五右衛門は払いのけた。

「途中で怪我したから、預けてきたの。つか、おまえいまさら気づいたの？」

虫明の無事を聞いて安心した円融院は愁眉を開いた。しつこく五右衛門をつつく九蔵へ笑いかける。

「こちらの遅い方が九蔵さんですね。まあ、黒田。あまりに痩せたので、だれだか分かりませんでしたよ」

発作の余韻で魂の抜け出たようになっていた黒田にも、円融院は微笑みかけた。続いて弁之助、そしてその脇の草履と恵比寿へ向き直る。

「それと……こちらの精悍な方たちはどなたかしら」

「関ヶ原の宿より同道しております、新免弁之助でございます」

秀家に紹介され、弁之助が頭を下げる。普段の粗暴さとは打って

変わって、じつに堂堂たる所作だった。

「まあ、新免……。宇喜多にご縁のある方なのでしょね」
「残るこやつらめは」

秀家に睨まれ、気絶した恵比寿を介抱していた草履は震え上がった。後頭部には、いまだ包丁が刺さったままである。

「八郎どの。旅は道連れと申します。何があつたかは存じませんが、そのような口をきいてはなりません」

「しかし」

「まして、怪我人ではありませんか」

言われた草履は、ふと自分の後頭部へ手をやった。刺さった包丁にぎよつとしたかとおもうと、白目を剥いてぶっ倒れる。

「まあまあ、大変ですね。あとで医者に見せましょう」

円融院は一同を見渡し、やにわにくすくすと笑い声をたてた。

「不思議なこと。死んだとおもつたわが子が、かような姿で帰ってくるなんて」

五右衛門たちは自らの肢体を見下ろした。百姓連にたかられたせいで、全員が蓬髪半裸である。森田など、大暴れしたせいでフンドシすらまともに締まっていないうり様だ。顔を赤くした森田の腰へ座布団を掛けてやってから、円融院は立ち上がった。

「先に湯を浴びなさい。食事はそれからしましょう」

五右八郎とわたし

湯をたててくれたのは、寺男に扮装した先発組の三人であった。風呂場の板壁越しに語らい、夕餉の席では酒を酌み交わした。

「のう、五右」

酔いを醒ましに出た縁側で、秀家と二人きりになった。

境内は、除夜参りの焚き火で明るい。村の家長たちの酒を飲む声が小さく聞こえてくる。鐘をつく音が重く響いた。大晦日だという実感がじーんとする。

「赤子の名前は、決めたのかのう」

秀家が、酒で熱くなった頬をほころばせた。

矢野家で陰所生活を営んでいたころは、この酔い顔がひどく間抜けに見えた。だが今は、酔った秀家といっしょにいるとほっこりと落ち着いた気分になる。

「うーん。まだ、かな」

五右衛門は掻巻かいまきをかい込んだ。闇夜に吐く息が白い。月はごくごく細く、星が夜空いっぱいに出ている。座敷の障子から漏れる灯りが、秀家の横顔を黄色く染めていた。

冷えた縁にぺたりと腰をおろし、秀家は五右衛門を見上げた。大きな目が潤んでギヤマンみいだ。

「わしの名をやるうとおもっのじゃが、どうじゃ」

「えっ？」

五右衛門が目をまるくすると、秀家は照れくさそうに頭をかいた。「太閤さまより授かった秀の字はやれぬがの。家、ならばやれる」

「家吉とか？」

「家助、家平、家右衛門……うーむ。ぱっとせぬのう」

「じゃあ、八郎のほうをちょうだいよ。そっちのほうが気楽でいいし」

円融院に？八郎？と幼名で呼ばれ面映いような顔をしていた秀家をおもい出して、五右衛門は嘖き出した。

秀家は、真面目くさった顔で腕を組んだ。

「む。五右八郎、か」

「なんでおれの名前とくつつけるの」

「おぬしの子じゃからの」

秀家が、白い歯を見せてニツと笑った。

しまらない名前ではあるが、それもいい。ふたつくっつけば、何でもできそうな気がする。

五右衛門がうなずくと、秀家は懐紙と矢立を取り出し、座敷からの明かりを頼りに？五右八郎？と書き付けた。五右衛門へ差し出す。手渡しざまに、秀家は真剣な顔をした。

「本当は何とつけようとおもっておったんじゃ」

「え？」

五右衛門は、秀家の目をまじまじと見た。

「さきほど、決まっておったような素振りをしておったではないか」

「鋭いね」

「三月もともにおれば、わかる」

鐘がひっきりなしに響いてくる。

明かすべきか逡巡したが、けっきょく正直に言うことにした。

「あのさ」

「うむ」

「じつは……三左衛門、つてつけようとおもってたんだけど」

「五右八郎よりもよい名ではないか」

「むさく育っちゃいそうな名前だけどね」

辛い素振りも見せず、秀家は笑った。

ほつとして、五右衛門もいっしょに笑った。

三左衛門の顔をおもい出すと、辛くなる。しかし同時に、誇らしい気持ちにもなった。

いろいろあったが、秀家は無事でここにいるのだ。

「三左衛門とつけられぬのは、惜しいのう。そうじゃ五右、もう一人つくるのじゃ」

「えええ！ 勘弁してよ」

「何を言う。よい奥方ではないか」

「ひとことだからそんなこと言えるんだってば」

げっそりした五右衛門を指差して、秀家は大きな笑い声をあげた。今度こそ、腹の底から笑えたようである。

つられて五右衛門も高い声を出すと、酔って足元のあやしくなつた弁之助が、障子を蹴破つて縁へ倒れこんできた。同じく酔いどれの森田がその上へぶつ倒れる。

向こうでは、正気を取り戻した黒田が仲間とともににこやかに酒を飲んでいる。

村では、虫明とおらんも楽しくしているだろうか。

もういちど顔を見合わせて、五右衛門と秀家は笑いあつた。年が暮れる。

「遅すぎんだよ。いったいどこをほつつき歩いてたんだい」

上がり框に腰かけたとたん、おかねの罵声が五右衛門を直撃した。「おれにもいろいろあつたんだしさ。もうちょっと優しくしてくれてもいいんじゃないの」

道中でいろいろあつたのは事実であるが、円融寺に着いてからは遊び放題の酒盛り三昧。ようよう寺を発つたのは、正月飾りの取れた睦月の八日だった。自宅に到着した今現在は、十一日の暮れである。

五右衛門の嘘はとくにお見通しらしく、おかねの剣幕は凄まじい。

「甘つたれんじゃないよ。女子供をほつぽつといて遊び歩いてたくせにさ」

あまりの雑言に腕の赤ん坊がきゃーんと泣いたので、おかねは抱

き直してあやした。

生まれて一月もたたない赤ん坊は、どう見たって猿である。おまけに、両親に似たのかえらく不細工だ。

しかし、この子が五右八郎だとおもうと感慨もひとしお。五右衛門は頭を撫でてみた。泣かれた。おかねが、五右衛門の手を叩き落とす。

「やたらと触んじやないよ」

「お取り込み中のとこスイヤセンが、おじゃましやす」

でかい風呂敷包みを負った草履顔が敷居をまたいだ。続いて恵比寿腹。そして九蔵が玄関をくぐる。

おかねは、キツと五右衛門を睨みつけた。

「あんた、またでくのぼうを拾ったのかい」

「いや、拾ったわけじゃないんだけど。どっちかっていうと押しつけられたっていうか」

秀家の母・円融院のとりなしで命を助けられた草履と恵比寿であったが、虫明の一件がある。宇喜多一行からの心証はよくなかった。そんな二人を円融寺に残してきては角が立つし、本人たちもかたぎの仕事につくと固く誓っているので、しようがなく五右衛門が引き取り、美濃で働き口を探してやることにした次第だ。

彼らが同行したせいで虫明の滞在する村にも寄れなかったし、途中で強盗と間違えられて捕吏に全速力で追われもしたし、まったく散散であった。

そして家に帰れば、おかねの冷たい目である。

五右衛門は、忌ましい気分で草履と恵比寿を見やった。

「おれだって、こんなの預かりたくなかったんだよね」

「冷てえこと言わねえでくだせえよ、大兄貴」

草履顔が揉み手をする。

「その呼び方やめてよ。おれまでチンピラの仲間みたいじゃないの」「へえ。じゃあ何とお呼びすりゃ」

巨大なつづらを担いだ恵比寿腹が口をもごもごさせた。同じく大

荷物の九蔵が、元氣よく手をあげる。

「旦那さまって呼べばいいんだよー」

「さすがは九蔵の兄貴。ねえ、旦那さま」

「なんでも言いつけてくださいよ、旦那さま」

草履も恵比寿もへこへここと頭を下げる。

五右衛門はうんざりした。

「やめてってば。おれ、別におまえらのご主人さまじゃないじゃん」

「旦那さまに見捨てられちゃ、おれら行くところがねえんですぜ」

草履は半泣きになって、必死で五右衛門にすがる。恵比寿のほうも、へつらうような上目遣いで五右衛門を見た。

五右衛門は溜息を吐いた。

「せめて、ついてきたのが弁之助くんだったらよかったのに」

成り行きで円融寺まで同道した弁之助は、草履や恵比寿と同様、行く当てがなかった。

五右衛門は、いつしよに美濃へ来ないかと誘ってみたが、大人しく百姓をやる弁之助ではない。武芸を糧に立身出世するんだと息巻いて、宇喜多一行とともに円融寺に残ったのだった。

「おまえらなんて、犬の餌にもならないじゃん」

「そ、そんなこと言わねえてくださいえ！」

「旦那さま、おれら、なんでもしますんで！」

草履も恵比寿も、発情した大蛸のごとく必死で五右衛門へ手足を絡ませる。

「わかった、わかったってば！ いいから離して。おれ疲れてんだから、家にあがらせてよ」

元もがり二人の抱擁を振り切って、五右衛門は板間へ転げあがった。背に突き刺さるおかねの視線が痛い。

そこへ、おふさが丸盆にのせた湯飲みを運んできた。

「おかえりなさい、父さま。お疲れになったでしょう」

「おふさは優しいね。ありがと」

弁天のような娘の笑みを見て、ようやく五右衛門はほっとした。

湯がうまい。おふさは、もがり二人と九蔵にも湯を勧める。

「九蔵さんも大変でしたでしょう。お客さまがたも、あがってください」

「へ、へえ」

草履と恵比寿は、おふさのあまりの美しさに棒立ちである。

彼らの背負った荷物を預かるうとしたおふさを、おかねが厳しく嗜めた。

「もうすぐ母親になるってときに、重いモン持つんじゃないよ」

「え、もつなつてんじゃん」

五右衛門は首を傾げた。おかねが、馬鹿にしきつた視線を投げたよこす。

「なに寝ぼけたこと言つてんだい。おふさがだよ」

「えええええ！？」

五右衛門はおふさの下腹をガン見した。普通にぺったんこである。おふさは恥ずかしげに身を擦った。

「なんで？ として？ そんなふうには見えないけど」

「まだ三月にもならないんだから、腹が出てくるわけないだろ」

五右八郎をあやしなから、おかねが吐き捨てるように言った。

「三月……」

となれば、だれの子かはおのずと知れている。五右衛門は、おふさの手をとつてぐるぐる踊りまわった。

「やつたじゃん、おふさ！ ちゃんとお殿さまと仲良くしてたんじゃないの！ お礼もたくさん貰えたし、ほんつと最高！」

九蔵ともがり二人の背負ったつづらには、円融院が持たせてくれた小袖やら黄金やらが詰まっている。念願かかって大金持ちだ。

そのうえ、秀家からは子宝。いらぬおまけはついてきたものの、今までの苦勞が一気に報われた気分である。

大はしやぎの五右衛門へ、おかねはぴしゃりと言いつつ放った。

「あんたつて男は、つくづく見る目がないね」

「なに、どつういふこと？」

「おふさに訊いてみな」

手を握り締めたまま、五右衛門はおふさの顔をおそろおそろ覗き込んだ。おふさは、幸せそうな目を自らの下腹に向けている。

「おふさ。卒爾ながらおたずねするけど」

五右衛門は口ごもった。湯飲み片手に棒立ちした草履と恵比寿が、ごくりと唾を飲む。九蔵は頓着なく、ずるずる音をたてて湯をすすっている。

緊張のあまりキーンとしだした耳を小指でかっばじってから、五右衛門は意を決して切り出した。

「……それ、だれの子？」

おふさの顔が桃色に染まる。ふっくらとした頬に両手を当て、ぽつりと

「……黒田さまの」

「黒田ちゃんの……？」

「はい。黒田さまの」

おふさが、花のようにくちびるをほころばせた。五右八郎がきゅーんと泣く。おかねがあやす。草履と恵比寿はこわごわと五右衛門の顔色をうかがった。湯を飲み干した九蔵が湯飲みを高々とかかげ、おかわりと言った。

東の間の沈黙ののち。

「ぶっ殺す!!!」

五右衛門は駆け出した。

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2939k/>

五右八郎

2010年10月8日11時30分発行